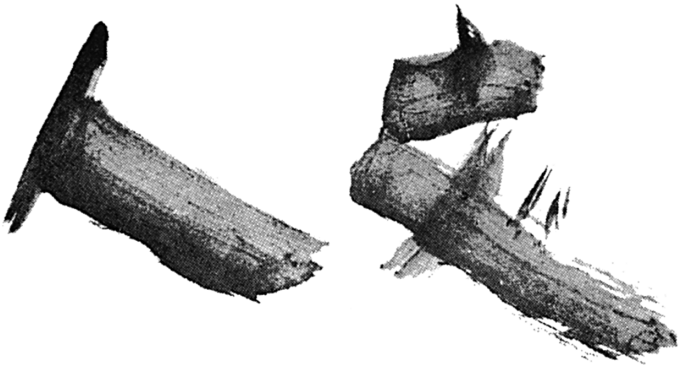


第七二号

2025

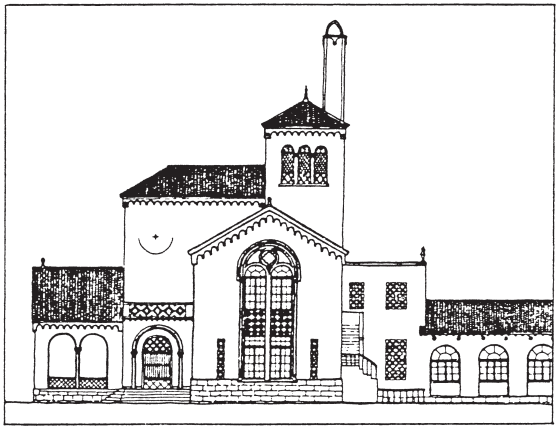
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389－147X

人　文　第七二号

2024年4月―2025年3月

も　く　じ



随想

ブラタカギ……高木　博志

人文研に来て初めて聴いた退職記念講演の思い出……岡田　暁生

講演

夏期公開講座　名作再読16

モノの認識論としての近代科学

――下村寅太郎『科学史の哲学』を読む――……岡澤　康浩

河野六郎『文字論』――文字とことばのメカニズム……野原　将揮

アドルノ『楽興の時』……岡田　暁生

講演会ポスターギャラリー二〇二四……

彙報

共同研究の話題

共同研究について……高木　博志

主婦の戦争――そのマジョリティ性と周縁性……林田　敏子

四十三年ぶりの禅研究班……何　燕生

「教育」と「社会運動」の隙間、あるいは接合点

――研究対象としての京都人文学園――……奥村　旅人

百足の思考……冨山　一郎

「会読」という共同研究の「成果」……岩城　卓二

岩井会の戦後社会運動史資料……小堀　聡・福家崇洋

名碑拓本のうそほんと……倉本　尚徳

古典の現代語訳に付ける語注について

――理想と現実のはざま――……船山　徹

所のうち・そと

生（ぜ）の記憶の手ざわりについて……森谷　理紗

映画の余韻――境界管理がもたらす「痛み」……李　英美

随筆との距離……劉　冠偉

書いたもの一覧……

ブラタカギ

高木博志

在任中、二〇年以上にわたって、ブラタカギと称して、学生たち、共同研究班、白牛会などで巡見（フィールドワーク）をしてきた。観光言説に満ちたブラタモリがとりあげない歴史散歩である。たとえば幕末の内裏図をもっての京都御苑歩き。祇王寺や滝口寺は二〇世紀に成立したとの嵯峨歩き、あるいは実際には茶畑は少なくかつ創られた貴族文化イメージである現代宇治めぐり。奈良・畝傍山麓の洞部落跡の踏査など。毎年二度以上は、授業で学生たちをブラタカギに連れ出した。学生には講義はともかく、嵯峨なら法輪寺門前の鳥すき焼きの鳥市（昭和初期）、東山巡りでは終点東九条・豚焼き肉の水月亭の宴が印象深かったようだ。自信のコースは、東山の「花街・遊廓・葬送の場を考える」である。このコースには累計五〇回は行ったと思う。

だいたい一三時に**祇園石段下**に集合。石段上で、今日は**八坂神社**・祇園から東九条まで、上京・下京の町の周縁における性や死や差別を考えると口上。四条通北東側の祇園乙部は売春を

強いられた娼妓主体の祇園乙部、現在最も華やかな四条通南側の花見小路は建仁寺境内を明治期に開発してできた舞妓・芸妓の祇園甲部と説明する。溝口健二の映画『祇園の姉妹』（一九三六年）で木綿問屋のぼんぼんは、祇園乙部の芸者梅吉宅まで落ちぶれるのである。**円山公園**は文明開化の場であり、しだれ桜は宝寿院が廃寺となり庭桜のみが残ったもの。円山には、也阿弥・左阿弥・中村楼（現役）などの外国人向けホテルが営業した。八坂神社の正門（南門）を下がり東に路地を入ると、石畳に高級料亭が建ち並ぶ**石塀小路**に到着。この小路の落ち着いた景観は、戦前までは花街に隣接した席貸街でいわば今でいうホテル街であった。性愛の空間が、もてなしの料亭街へと意味づけが転換している。

東山通を西に渡り、現在、「もてなしの文化」の中心、花見小路の**祇園甲部歌舞練場**の場所には**駆黴院**（くばいいん）（娼妓の梅毒検査や入院のための施設）があった。明治期に四条より南は、祇園のはずれの「台湾村」と呼ばれるほど辺境であった。さらに南下した**宮川町**は、今は祇園甲部とともに二十人以上の舞妓がいる「もてなし」の花街である。しかし一九一二年には芸妓二六六人、娼妓二七二人がいたように、一九五七年の売春防止法施行までは売買春も行われた。竹久夢二や芥川龍之介は娼妓を買い、太秦の映画人は撮影が終わると登楼した。

宮川町の歌舞練場を下がると、中世の五条通であった松原通で、松原橋を東に清水道が続く。宮川町の東で松原通の北側に

は、中世の晴明塚に起源する荒龍神社が残る。明治維新まではハンセン氏病患者が居住する物吉村があり、市中に勧進し松原通の清水参詣者から喜捨をを受けた。松原通を東に行くと六道の辻の手前までが**弓矢町**で、居住する犬神人（つるめそ）は中世の祇園社の警護や清掃に携わった。祇園祭の武者行列が二〇二五年から復活する。ときに学生たちと武具の納められた弓矢町会所の弓箭閣で古文書を見せていただいた。

松原の**六道の辻**はこの世と来世の境界である。ここから東、そして清水坂から泉涌寺にかけて中世には鳥部野の死の世界が広がっていた。六道の辻では、幽霊子育て飴を食し、六波羅蜜寺でトイレ休憩。そこから清水焼の古い工房を南に抜けて、広い五条通につくと、京都は原爆投下候補地であり威力を試すために大空襲がなく町並みが温存されたこと、五条通の建物疎開を話す。

二〇二五年は柳宗悦が京都で「民芸」を発見して百年だが、五条坂鐘鋳町の**河井寛次郎記念館**でゆっくりと休憩する。この静謐な陶芸を生み出した空間にほっとする。河井寛次郎館の玄関、格子をバックに写真を撮るのが定番。

馬町を通って、南下し**豊国神社**に着く。ここには寛政期（一八世紀）まで奈良より大きな方広寺大仏が聳えていた。江戸幕府は大坂の陣の後、豊国社を破壊し、幕府が領地を接収するが、明治維新はそのリベンジである。江戸幕府を否定して、豊臣秀吉を顕彰する豊国神社が一八八〇年に創建された。隣接する**耳**

塚の大正期の玉垣には、侠客で興行主の小畑岩次郎のもと片岡仁左衛門・中村鴈治郎や桃中軒雲右衛門などの名が連なる。当時、歌舞伎・浪曲・浄瑠璃などで「太閤記もの」が一番人気の演目で、日韓併合後の「帝国」の世相にふさわしかった。そして大仏前の甘春堂、近世の名物・大仏餅（復刻）で一休み。

正面橋の北東、「元和キリシタン殉教の地」の碑があり、河原で火刑される「異教徒」の背後には大仏が聳えていた。橋を渡ると世界の**任天堂旧本社**のライト風建築（一九三〇年）が際立つ。任天堂の立地はまさに遊廓・七条新地に隣接した賭博・花札とかかわるのである。この**七条新地**（五条楽園）は五条大橋から正面通まで南北に続く。近年、建物が失われつつあるが、昭和戦前期には桃山調遊女のステングラスの洋風妓楼や唐破風の和風妓楼が軒を並べ、約千人の娼妓に労働者が買春した市内最大で最底辺の遊廓であった。当時、映画二回、あるいは上うな丼二杯程度の一円余で、一時間買春ができる「大衆売春社会」であった。そして夕暮れを、皆で崇仁地区を抜けて、東九条の**水月亭**まで急いだ。

ブラタクギ
BURATAKAGI

白牛会より、休日の特別イベントを提供いたします。高木所長よりご提案いただき、ディープな歴史お散歩を開催いたします。みなさまお誘い合わせの上、どうぞふるってご参加下さい。
白牛会幹事：伊藤順二・藤井律之・小川佐和子・行友三輪子

ブラタモリが抜かない
“花街・遊廓・葬送の場を考える”

ご案内人　高木　博志 所長

日　時　11/11(土) 13:00　★時間厳守！ ★小雨決行。歩きやすい服装で！
八坂神社石段下（東山四条）集合

懇親会　18:00より、東九条・水月亭（℡075-691-3783）

コース　円山公園～中村楼～祇園乙部～一力・祇園甲部歌舞練場・建仁寺～宮川町～朝明寺～六道の辻～鳥部野の墓地～河井寛次郎記念館～豊国神社～任天堂本社～七条新地　ほか

会　費　会員の方・非会員の方、2,500円（河井寛次郎記念館入館料500円と懇親会費2,000円）（特別企画のため、一律に会費を徴収いたします）
小学生以下、無料

当日の緊急連絡先　080-5003-3961

申　込　11/6(月)締切　申込用紙を本館1階エレベーターホール前の「白牛会」メールボックスに投函してください。または、幹事長・伊藤順二（junjiito@zinbun.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。
お散歩のみ参加、懇親会のみ参加の方も歓迎します。途中参加も応相談で可能です。

白牛会「ブラタカギ」申込用紙

出欠（いずれかに○）	ご出席［全行程／お散歩のみ／懇親会のみ／途中参加］、ご欠席
お名前	
ご同伴者の人数	（　　）名　うち、小学生以下のお子様の人数（　　）名
備考（何かあればご記入ください）	

ブラタカギ・チラシ（2017年）
（行友三輪子さん作成）

ブラタカギ地図
（岡恵子さん作成）

人文研に来て初めて聴いた退職記念講演の思い出

岡田暁生

大学での授業であれ、人文研アカデミーのような市民講座であれ、あるいは人文研の主たる業務である共同研究会であれ、発表構想を練るとき人は必ず何人かの具体的な参加者を想定しているものであろう。「あの人が来るだろうからこのネタも入れておこう」、「こう書くとあの人はどういう反応をするかな……」、「この話はあの人には当たり前すぎるから割愛しよう」等々。だが私くらいの年齢になると、こうした「仮想参加者」は必ずしも生きている人だけとは限らない。最近になって気がついたのだが、もう亡くなっている人に向かって「あの人ならこれについてどう言うかな」などと無意識のうちに話しかけつつ、レジメを考えたりしていることも結構あるのだ。

先日（3月6日）の人文研における自分自身の退職記念講演でも、私は改めて「人は生きている人たちだけに向かって話しているのではない」と強く感じた。当日は発表の本題に入るに

先立って、どういうわけか人文研の名誉教授である故前川和也先生のことが急に頭をよぎり、予定外であったが先生の退職記念講演のエピソードから話を始めたのである。聞きようによっては講演を前川先生の思い出に捧げたように見えたかもしれない。

今調べたら前川先生が退職されたのは二〇〇五年三月とあるから、ちょうど二十年前である。人文研でご一緒したのはわずか二年。そもそも西洋音楽史を生業とする私と古代メソポタミア研究の大家だった先生とは何の研究上の接点もなく、人文研に来てからようやく「あ、そうか、昔読んだ『世界の歴史：古代オリエント』（確か河出書房から出ていた）を書いていたのはこの先生だったんだ……」と気がついたくらいである。小学校の頃の私は古代文明オタクで、「前川和也」の名前にかすかに記憶があったのだ。そして私が人文研に来て初めて聴いた退職記念講演がこの前川先生のものだったのだが、あれはとにかく滅法面白かった。専門が違うなどといわず、もっとメソポタミアの話を聞いておけばよかったと後悔した。

もちろん専門的な内容についてはまったく記憶がない。だが今でもはっきり覚えているのが講演の締めくくりである。それはおよそ次のようなものだった——自分にとっての「研究とはつまるところ供養だ」、三〇〇〇年も前に楔形文字を粘土板にこうやって書きつけていた人がいる以上、「それを読んであげないといけない」（カギカッコの部分は先生が言った言葉その

ままである）。続けていわく、当日の講演で言及された粘土板が出土された場所（確かバスラだったと思う）は、イラク戦争の爆撃で破壊されてしまった。そんな状況の中で「こういう研究をしてそれが今のイラクに対して何の役に立つのかと尋ねられれば、こんなものは何の役にも立ちません」。――この「何の役にも立ちません」とおっしゃられたときの口調を今でも私は鮮明に覚えている。意外であった。なにせ四十年以上にわたる自身の研究の積み重ねである。それを自ら「何の役にも立たない」と断じる。そこには学問というものの無力に対する諦念があったのであろう。潔いと思った。そして「何の役にも立ちません」に続き、先生は「これが何かの役に立つとすれば、こういうこと（＝粘土板の三千年前の文字を読むこと）をしていれば、少しくらいは人間の品がよくなるかな、と。それだけです」とおっしゃった。これが最後の最後の締めくくりであった。

こうやって書いていて、細かいことまで覚えていることに自分でも少し驚く。それだけ意識もしないうち強く記憶に残り続けていたのであろう。いざ自分が退職講演をする番になって、迷うことなくタイトルを『音楽研究は大学教育の対象たりうるのか？――その「実用性」を考える』としたのは、無意識のうちに前川先生の言葉が二十年間自分の中で反響していたからかもしれない。「その研究が何の役に立つのか？」――つまるところ私にとっての音楽研究の有用性とは、「少しくらいは社会の気配に対するセンサーが磨かれる」ことにあるのだが、これ

が「少しくらいは人間の品がよくなること」という前川先生の言葉のパラフレーズであることは言うまでもない。だがそれもこれも、当日の講演を終えてからはたと気がついたことだ。自分の退職公演を先生へのオマージュとする意図など、当初の私には毛頭なかった。実は研究する（＝考える／話す／書く）とは、自身がこれまでに出会った人々がふと口にした言葉の無意識の反復変奏なのかもしれない。その意味でも研究とは確かにどこか「供養」と似ている。

講演

夏期公開講座

名作再読16

モノの認識論としての近代科学

――下村寅太郎『科学史の哲学』を読む――

岡澤康浩

京都学派の科学史家・科学哲学者である下村寅太郎（一九〇二―一九九五）は、一般には「近代の超克」座談会（一九四二年）の出席者の一人として知られる。この座談会における下村の発言として特に有名なのは、小林秀雄との間で交わされた「機械」と「精神」をめぐる激しい応酬だろう。アメリカが代表するところの機械文明には精神がなく、超克の対象に値しないという河上徹太郎の発言に、小林は同調してみせる。これに反発した下村は、機械を造るのもまた精神であると指摘する。近代の超克には「機械を造った精神」の問い直しが不可欠だとする下村に、小林は機械的精神などというものは存在しないと答えるだけで、まともにとりあうことはなかった。小林の反応が一種のアイロニーを狙ったものなのかは判然としないが、仮にこれが彼の本心だとしたら、その認識は浅はかだという誹りを免れないだろう。座談会での議論のレベルの低さに愕然とする下村を慰めたのは、機械芸術たる映画を論じた津村秀夫だったとされる。

文学を専門とする小林と、科学を専門とする下村の議論がすれ違いに終わったのは、一見すると自然に思えるかもしれない。だが、下村はあくまで京都学派の哲学者なのであり、科学者ではなかった。さらに、ダ・ヴィンチやルネサンスの精神史の仕事でも知られるようになる下村は、単純な近代主義者でもなければ、機械万能論者でもなかった。それゆえ、小林と下村の間にいかなる対立が存在したにせよ、それは文理の対立といった単純なものではなかった。下村はあくまで精神史家として、機械を造り出した「精神」を理解し

ようとしていた。機械こそが近代科学を理解する鍵だと、下村は信じていたからだ。

「近代の超克」において下村が展開した議論の多くは、その前年に出版された『科学史の哲学』（一九四一年）においてすでに論じられていたものだった。この本で下村は、十七世紀西ヨーロッパで生じた近代科学の登場を世界史的事件としてとりあげている。下村の基本的な考えは、近代科学とは実験を中心として遂行される認識活動だというものだ。こうした初期近代のヨーロッパに生じた実験活動の理論化を近代科学の起点とする見方自体は、今日では時代遅れな科学革命論の一種に思えるかもしれない。実際には、科学史記述のあり方自体を問い直すことが『科学史の哲学』の主題である以上、下村の議論はもっと複雑であった。しかし、「機械を造った精神」をめぐる議論との関連においてより興味深いのは、彼が近代科学の特徴として抽出した、実験についての独特の理解の方だろう。

下村は実験による認識がモノに依存していることを強調する立場をとっていた。下村はこう書いている。「実験は客観における客観による認識である。物による物の認識である」これだけではあまりにも抽象的であるが、彼の議論を追っていけば、彼が述べようとしているのは以下のようなことだということがわかるだろう。すなわち、実験とは自然な状況においては生じない現象を人為的に制作し、これを操作することを核心とする認識活動なのであり、それを可能にするものこそ科学的装置、つまり機械なのである。こうした装置を介した現象の制作を重視する議論は、彼の同時代人でもあるガストン・バシュラール（一八八四―一九六二）の「現象工学」論を想起させる、優れたものだと言えるだろう。

実験を特に現象の制作と結びつける理解は、下村が展開する独特の魔術論の基礎ともなっていた。下村によれば、一見対立するかに見える近代科学と自然魔術は、実は共同の精神を有している。なぜかといえば、実験も魔術も、そこにすでに存在するものではなく、むしろいまだ存在しないものを存在せしめる自然の操作なのであり、いわば「超自然」とでも呼べる新たな自然の制作を核とするからである。この観点から言えば、近代科学とは、機械を駆使することで、自然の改変という魔術の夢を実現するものなのだ。

興味深いことに、モノと機械の役割を強調して描き出される下村の近代科学論は、冷戦期のアメリカによって自らの優越性の根拠として盛んに喧伝され、敗戦後の日本でも一般化するようになった、リベラル的近代科学理解と鋭い対比をなしている。下村が古代ギリ

シャに端を発する数学的証明という方法を近代科学の実験と対比的に描く時、このことはより明確になる。下村によれば、証明というものはロゴスに基づく認識なのであり、そこでは公共的な議論によってひとびとは真理に至ることができるとされる。これに対して、実験とは不合理で頑迷なモノと、それを操作する機械と、その機械になかば取り込まれる人間たちとがおりなす複雑なインタラクションを通して、知識を生み出す実践である。自由な諸個人が理性的議論によって真理に至るという証明がリベラル的科学観に合致するものであるのに対し、実験においては人間の思惟や議論が占める地位は著しく低下してしまっている。モノや機械は、言葉によって説得されるようなものではないからだ。それゆえ下村は、証明を支えるのが議論にもとづく理性であるのに対し、実験を支えるのは機械を造る別種の理性なのだと、両者の理性の性質自体が大きく異なるとさえ主張する。

下村は、近代を支える理性を機械を軸としてとらえなおそうとしていた。それは、もはや認識のあり方の再検討にとどまらない、政治的および倫理的な帰結もともなっていた。ロゴスによってコントロールすることができないモノに直面する人間たちは、機械によって武装し、あるいは自らの身体を機械の一部へと組み込み、そうすることによって、自らを取り巻く環境を積極的に改変する技術的動物となる。こうした人間のエージェンシーの再編は、人間にとっての自由という概念も変容させる。「近代の超克」において、下村は人間の自由を思想や信条といった内的自由と理解するモラリストを退けていた。なぜなら、下村にとって自由とは、単なる思惟の自由の限界にとどまらず、所与として与えられた環境を物理的に改変することで克服できる能力の程度によってもはかられるものだからだ。ここにおいて、機械は人間の内面を脅かす存在ではなく、むしろ人間と接続することによって、人間たちに許される自由を拡張し、あるいはその自由の限界を画する存在として現れるようになる。

下村の議論をこのように敷衍すれば、自然を改変する機械の製作・操作を核とするものとして近代科学を見るということは、私たちが「人間」「理性」「自由」と呼ぶものの根源的な条件として機械や技術をとらえ直すことだったともいえるだろう。小林秀雄を前に、下村が「機械を造った精神」について論じようとしていたとき、彼が求めていたのはこうした機械を造り出す理性のクリティークなのであり、そのクリティークを通して、機械と不可分になった近代的「人間」なる存在者に許された可能性とその限界を露呈させること

であった。「近代の超克」なるものが、単なる近代の拒絶ではなく、その可能性と限界を明らかにし、またそうすることによってその限界を真に超克することなのであれば、それは機械を単に拒絶することはできない。近代の超克は、機械と技術のクリティークとしてこそ展開されなければならない。下村の問題意識を、こう言い替えることもできるだろう。

近代の批判的検討を一つの使命とする人文研において、下村の発想は意外なほど馴染み深いものに聞こえるだろう。少なくとも、下村の議論は、かつて人文研で助手を務めた浅田彰による技術の批判理論とでも呼べる実践と比較可能だろう。浅田が制作し、メディア理論家のポール・ヴィリリオも出演したテレビ番組「事故の博物館」（一九八九年）は、事故という技術的破局を一種の臨界点としてとりあげることで、技術がつくり出すと同時にその限界も画すところの人間の可能性の領域を明らかにし、人文学の使命としてのクリティークを遂行するという方向性を示していた。このようにまとめなおすならば、機械を製作する理性を歴史化することでリベラル的主体概念や近代的人間像を乗り越えようとする下村の実験-機械論は、浅田彰や東浩紀らによって反-人間中心主義的メディア論として展開されてきた技術のクリティークの系譜に位置づけることもできるだろう。

下村のこうした再読は日本において戦前・戦後をまたがって存在してきた反-人間中心主義的技術論という新しい知的系譜を明らかにするポテンシャルを秘めている。だが、そうした再読には、下村と京都学派との関わり、およびその政治的含意についての一定の注意が必要となるだろう。下村は、大日本帝国海軍の建設にみられるような軍の機械化、さらにはそれを可能にするような統合された科学・技術・産業体制の構築に積極的な関心を示していたし、太平洋戦争中には大日本帝国の戦争を歴史的に不可避の過程として肯定するかのような議論も展開していた。リベラル的主体の批判的検討が直ちにファシズム体制賛美に結びつくわけではないものの、ドイツにおいて優れた技術論者がしばしばナチズムと共鳴してしまった事態を考えるならば、下村の再読はそうした危険性を理解した上で行われる必要があるだろう。

近代科学を、モノを制作・操作する認識論としてとらえかえし、これを魔術、機械、技術といった論点とむすびつけなおすことで、下村の『科学史の哲学』は人間、科学、理性についての我々の理解を揺さぶる議論を展開していた。彼の近代科学論は、まさに「近代の超克」というテーマにふさわしいものだった。その

議論の射程は「人間」なる概念に埋め込まれたヨーロッパ中心主義の批判が行われている現代においては、非西洋世界からの理論的介入として無視できないものとなるだろう。さらに、彼の実験科学論は実験という営みを主体・客体そのものがそれを通して生まれ出るような、人間・機械・自然のメディエーションとして理解する方向を指し示していた。それゆえ、いま下村を読み直すことは、科学技術論とメディア論が「技術」と「人間」のクリティークという課題を介して共鳴してきた、そんな近代日本の隠された知的系譜を明らかにすることにも資するだろう。

河野六郎『文字論』

——文字とことばのメカニズム

野原将揮

『文字論』の著者である河野六郎氏は兄の与一の影響で幼少よりフランス語に触れ、中学の頃にはロシア語、サンスクリット語を学び、高校に進学するとスウェーデンの東洋学者であるBernhard Karlgrenの研究に深く傾倒するに至ったようである。東京帝国大学では小倉進平教授の勧めにより朝鮮語・朝鮮語学を専攻し、六朝期の『玉篇』に見える漢字音に関する学士論文を基に、処女論文「朝鮮漢字音の一特質」を発表する。卒業後は京城帝国大学に赴任し、その後東京文理大学等を経て、東京教育大学に着任する。「朝鮮漢字音の研究」で東京大学より博士学位を取得というのが、大まかな経歴である。

この経歴からも明らかなように、河野氏は多くの言語に精通し、専門分野での貢献も大きい。とりわけ朝鮮漢字音や中国の上古音、中古音に関する音韻研究ではきわめて優れた仮説を示しており、その影響力は計

り知れない。今回、『名作再読』で取り上げたのは河野氏の「文字」に関わる論考を集めた『文字論』である。

河野氏の文字学・文字論に対する考え方については本書を読んでもらいたいが、特に第一章「文字の本質」には氏の文字に対する態度がはっきり示されておりおすすめである。実は河野氏は京都大学の西田龍雄氏と共著で『文字贔屭』（三省堂）という書籍を出版しておられる。河野氏の考え方は『文字論』の内容とほぼ変わりがないが、こちらは西田氏との対談をベースに書籍化しているためか、却って理解に難があることもしばしばであるので要注意。

ここでは『名作再読』でお話したことに加えて、文字と言語に関することを紹介しておきたい。筆者は数年前にも同じく所報「人文」（69号）で「トランプVSチュワンプ」という雑文を書いたが、2024年は図らずもアメリカ大統領選挙の年であった。今度の候補者はカマラ・ハリス氏（Kamala Devi Harris）である。さてハリス氏の中国語の一般的な表記法は「卡玛拉・黛维・哈里斯」とのことである。批判を恐れず無理やりカタカナにすると「カマラ・ダイウェイ・ハリス」となるが、穏当な音訳と言えよう。面白いのはトランプ氏に「特朗普（トランプ）」と「川普（チュワンプ）」という音訳語があったように、ハリス氏にもやはり「賀錦麗」という別の音訳語があることである。これを中国語（マンダリン）に基づきカタカナにすると「ハージンリー」もしくは「ホージンリー」となる。「おいおい！　ぜんぜん違うじゃないか」と思われるかもしれないが、安心してほしい。「賀錦麗」はおそらく広東語を基にした音訳語であって、広東語によれば「ホーカムライ」となる。つまり「賀（ホー）」が「ハリス」を表し、「錦麗（カムライ）」は「カマラ」を表していると推定される。このように音訳語一つとっても、基礎方言によって表記に差異が生じるのが音訳語の面白いところである。たとえば「爵士」はマンダリンで「ジュエシー」となり、一体何を意味しているかわからないが、上海語で読めば「Jazz」としっかり聞こえる。近代中国語の音訳語研究とその基礎方言の同定はいまも盛んに行われているが、同様の現象が現代でも起こっているのは見逃せない。

もう一点は『名作再読』でも紹介したことを述べておきたい。我が家の長女が5歳か6歳の頃に母の日の手紙をせっせと書いていた。横から覗いてみると、「ままへ　歯歯のひおめでとう」と2Bの鉛筆で力強く記してあった。「母の日」+「おめでとう」というコロケーションに対する疑問は置いておくとして、「歯歯

のひ」という表記に衝撃を受けた。つまりこういうことである。「歯」の固有の字音は「シ」であり、これを訓読して「は」と読ませる。その「歯」を二つ重ねて「母（ハハ）」と読み替えさせるわけである。すなわち「歯（シ）」から「は」への読み替えは訓読み、これを「はは」と重ねて、音声的な当て字（仮借）で「母（はは）」に読み替えるという二段構え（もしくは三段構え）の高度な表現である。もちろん娘はそんな複雑なことは考えずに、その辺に転がっている辞書から「は」という字音をもつ「歯」を探しあて、二つ重ねて「母」と読ませただけである。

実は似たような言語表現は、出土文字資料にも見える。戦国時代楚地のとある竹簡には「王滄至帯」という表現が見られ、これは「王汗至帯（王の汗が帯までたれる…）」と読み替えられる。「滄」を「汗」に読むとはどういうことかというと、まず「滄（さむい）」と似た意味を持つ「寒」に訓読みする（「ソウ」を「カン」と読む。『説文解字』「滄、寒也」）。さらに「寒（カン）」と字音が似た「汗（カン）」に音声的な当て字で読み変えて、「王汗至帯」と読み替えるわけである。これはまさに「歯（シ）」を「ハ」に訓読みし、さらに音通で「母」に読むのと同様の読み替えである。もちろん娘が高度な読み替え操作を瞬時に行ったわけではないように、戦国時代の楚人もまたそんな複雑な操作を脳内で行っていたとは考えにくい。彼らにとって「滄」という文字は日常的に「ソウ」とも読むし、訓読みで「カン」とも読んでいたのであろう。それをたまたま当該の竹簡では「カン」に読み、音の近い「汗」に読み替えたに過ぎない。

近代の音訳語と現代の音訳語、戦国時代の楚人の文字使いと現代の子どもの文字使い、時代も環境も言語も書き手もまったく異なるが、そこにあるメカニズムはいまも変わらないようである。

アドルノ『楽興の時』

岡田暁生

難解な文章で知られる哲学者アドルノであるが、音楽になじんでいる者にとって、意外に彼の著作は感覚的にわかってしまうところがある。まさにアドルノ自身が『ミニマ・モラリア』の中で、フランス語学習について語っているとおりである。いわく「サドを言語で読むのに辞書は要らない。猥褻行為に関する、学校や家庭で教わらなかった、どんな文学書でも見かけなかったような言い回しが出てきても、暗夜の手探りで理解できるのだ。それはあたかも、性をめぐる遠回しな話や観察が子供の頭の中で性に関する正しい観念に結晶するのに似ている」(「On parle francais」)。

若い頃のアドルノはアルバン・ベルクに作曲を師事し、音楽批評家として旺盛な活動をくりひろげ、ピアノの腕前はトーマス・マンが驚倒するほどであった。彼はいわば音楽の精神からの哲学者であり、ピアニストにも作曲家にもなれた哲学者であった。西洋哲学が音楽をモデルにするようになった嚆矢はキルケゴールとショーペンハウアーであり、ついでニーチェであったが、アドルノはこの系譜を継ぐ哲学者である。彼は音楽という言語で哲学をする。音楽言語に通じている者であれば、直感的にいわんとするところがわかるのも、このことと深く関係しているはずである。

アドルノはトーマス・マン『ブッテンブローグ家の人々』そのままの、絵にかいたような十九世紀ドイツ教養市民家庭に生まれた。かなり年配の両親のもとで一人っ子として育ち、父はフランクフルトのユダヤ系ワイン醸造業者、母はコルシカ系でもともとオペラ歌手であった。つまり彼のなかではドイツ市民文化(ユダヤ系ブルジョワこそある意味で最も端的にそれを体現していた人々だった)とラテン系の芸術家の血が混ざっていた。当時女流芸術家とはいわば市民社会の「外」にいる者であり、自立した女であり、それは時にファム・ファタルの原型にもなり、ある意味で遊女と同じ立場にいた人たちである。「いかに市民でありつつ(父の商人的合理性)、かつ自由な個人(母の芸術的感性)であることが可能か?」という問いは、アドルノの思索の隠れた中心点であった。

世代の点でアドルノは第一次世界大戦後のロスト・ジェネレーションに属する。戦争が終わったときに十五歳。まさに社会に出ようとするときに、自分が育っ

たそれまでの幸福なベルエポック世界が瓦解した。ラヴェルへの愛情あふれるエッセイの次のパッセージは、アドルノ自身の自画像として読むべきであろう。「後世は［中略］［ラヴェルの］《ソナチネ》のメヌエットにおいて古人がいかに美しく昼下がりの五時を作曲したかを、耳にすることであろう。お茶の用意が出来て、子供たちが呼び込まれる。すでにどらが鳴らされて、子供たちはそれを聞きつけているのだが、もう一まわり遊んでから、ヴェランダの一座に加わるのだ。彼らがそこに居るあいだに、戸外は冷えてきて、彼らはもう外へ出て行くことができない」（「ラヴェル」『楽興の時』）。ベンヤミンと同じくアドルノは、プルーストの『失われた時を求めて』も熱愛していた。

ただしアドルノをして偉大な哲学者たらしめたのは、彼が決してノスタルジーの中に安住しなかったことである。故郷喪失からラディカルなモダニズムへ向かうのである。終生彼は「みせかけの調和」に対する激しい敵意を隠そうとせず、また芸術（音楽）は美ではなく認識であり真実であるべきだと確信していた。ノスタルジーの断念が前衛へ向かう。彼の作曲の師であったベルクらが、後期ロマン派の爛熟の果てに十二音技法へと転じたのと同じ軌跡である。

若い頃の音楽エッセイを戦後になってまとめた『楽興の時』は、後期ベートーヴェン論から始まる（「ベートーヴェンの晩年様式」）。新ウィーン楽派の熱烈な擁護者だったアドルノが、音楽エッセイを敢えてベートーヴェンから始めているのである。これはベートーヴェンへのアドルノ流クレドだと考えて間違いはあるまい。しかも『楽興の時』で扱われるベートーヴェンは楽天的な中期ではなく、謎めいた後期のベートーヴェンである。このエッセイはまるで宣言文のように始まる。いわく「大芸術家の晩年の作品に見られる成熟は、果実のそれには似ていない。それらは一般に円熟しているというより、切り刻まれ、引き裂かれてさえいる」。世界は引き裂かれて断片化され、時間は果実のごとき弁証法的円熟などもたらさない――もともと二〇代で音楽雑誌のために書かれたこのエッセイには、アドルノの後年の否定弁証法の原型がはっきりあらわれている。その思考モデルをアドルノは後期ベートーヴェンから学んだのである。

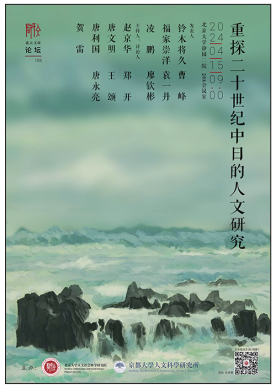
講演会　ポスターギャラリー　二〇二四

人文研アカデミー年間プログラム

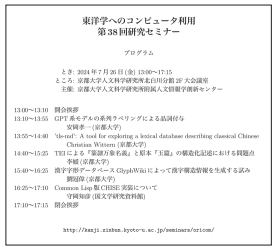
五月

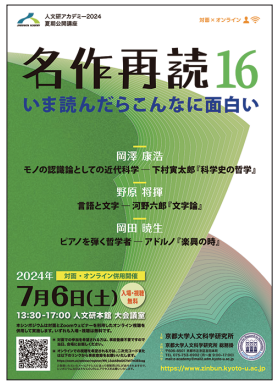
六月

四月

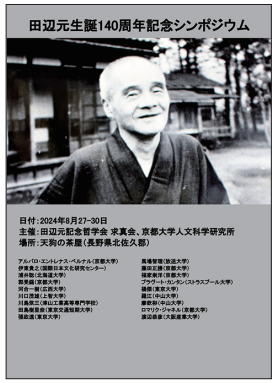


七月





十月



八月

十一月

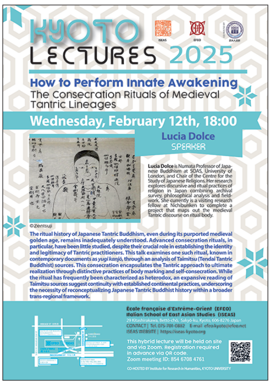
九月

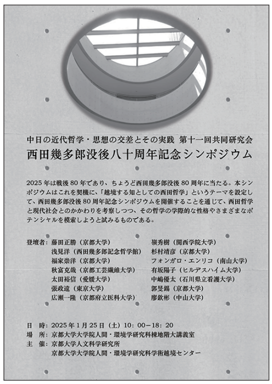
人文研アカデミー
2024
シンポジウム
近現代天皇制を考える学術集会
―「建国記念の日」に問う
高木博志（京都大学）
「「万世一系」の創出―天皇陵と大嘗祭」
原　武史（明治学院大学）
「『昭和天皇拝謁記』を通して見た昭和天皇像」
駒込　武（京都大学）
「台湾の植民地化／脱植民地化と天皇制」
永井　和（京都大学）
「各報告へのコメント」
2025年2月11日（火・休）13時00分〜18時00分
京都大学時計台百周年記念ホール
［対面にて実施］
司会：小堀　聡（京都大学）
主催｜京都大学人文科学研究所
お問い合わせ｜京都大学人文研アカデミー

KYOTO LECTURES 2025
ISEAS
EFEO
Lafcadio Hearn at 120: Strange Tales, Folklore, and Cultural Resonances
Commemorating the 120th Anniversary of His Death
Tuesday, January 14th, 18:00
François Lachaud
SPEAKER
Lafcadio Hearn (1854–1904) introduced Japanese culture to the West, beginning with his studies of voodoo in New Orleans before turning to Japanese ghost stories, folktales, and proverbs. Although often dismissed for its preoccupation with the exotic and criticised as "Orientalist," his work forms a vital bridge between cultures, preserving Japanese folklore while prefiguring the modern genre of folk horror. Following a year of commemorations and preceding a national broadcast on his legacy, this lecture reevaluates Hearn's writings, celebrating his enduring contribution to cultural storytelling and the supernatural.
François Lachaud is a professor of Japanese studies at the École française d'Extrême-Orient. His research focuses on the religious and cultural history of early modern Japan. He is the coediter of Mastering Languages, Taming the World (EFEO, 2023).
Uemura-Shoen-Female Ghost-c-1923
École française d'Extrême-Orient (EFEO)
Italian School of East Asian Studies (ISEAS)
29 Kitashirakawa, Bettō-chō, Sakyō-ku, Kyoto, 606-8276 Japan
CONTACT | Tel. 075-701-0882 E-mail efeo.kyoto@efeo.net
ISEAS WEBSITE | https://iseas-kyoto.org
This hybrid lecture will be held on site and via Zoom. Registration required in advance via QR code.
Zoom meeting ID: 876 3634 0538
CO-HOSTED BY Institute for Research in Humanities, KYOTO UNIVERSITY

一月

KYOTO LECTURES 2024
ISEAS
EFEO
Female Masculinity and the Business of Emotions in Tokyo
Monday, November 18th, 18:00
Marta Fanasca
SPEAKER
Marta Fanasca obtained her Ph.D in Japanese Studies at The University of Manchester in 2019 investigating the phenomenon of dansō (FtM crossdresser) escorts in contemporary Japan. After a Post-doc at the Higher School of Economics in St. Petersburg, she is currently a Marie Skłodowska Curie Global Fellow working on a project focused on commodification of intimacy and gender performativity, taking as case studies Japanese services providing emotional and/or sexual intimacy in a female/female context. Her articles have appeared in Asian Anthropology, Mechademia and Girlhood Studies, and her first monograph, Female Masculinity and the Business of Emotions in Tokyo was published by Routledge (2024).
In this lecture, based on her recent monograph, Marta Fanasca investigates the phenomenon of dansō (Female-to-Male crossdresser) escorts in contemporary Japan, situated between gender performativity and pop culture, commodified relations, and desires for self-expression. It documents the ambitions and fears of FtM crossdresser escorts, while also focusing on the female clients. Combining theories in anthropology, sociology, and gender studies with ethnography, it shows that crossdressing is employed by a segment of Japanese women to resist heteronormative and patriarchal societal expectations, while reinventing themselves and pursuing self-actualization.
École française d'Extrême-Orient (EFEO)
Italian School of East Asian Studies (ISEAS)
29, Kitashirakawa Bettō-chō, Sakyō-ku, Kyoto, 606-8276 Japan
CONTACT | Tel. 075-701-0882 E-mail efeo.kyoto@efeo.net
ISEAS WEBSITE | https://iseas-kyoto.org
This hybrid lecture will be held on site and via Zoom. Registration required in advance via QR code.
Zoom meeting ID: 810 5639 9420


KYOTO LECTURES 2025
ISEAS
EFEO
How to Perform Innate Awakening
The Consecration Rituals of Medieval Tantric Lineages
Wednesday, February 12th, 18:00
Lucia Dolce
SPEAKER
Lucia Dolce is Numata Professor of Japanese Buddhism at SOAS, University of London, and Chair of the Centre for the Study of Japanese Religions. Her research explores discursive and ritual practices of religion in Japan combining archival survey, philosophical analysis and fieldwork. She currently is a visiting research fellow at Nichibunken to complete a project that maps out the medieval Tantric discourse on ritual body.
©Zentsuji
The ritual history of Japanese Tantric Buddhism, even during its purported medieval golden age, remains inadequately understood. Advanced consecration rituals, in particular, have been little studied, despite their crucial role in establishing the identity and legitimacy of Tantric practitioners. This talk examines one such ritual, known in contemporary documents as yugi kanjō, through an analysis of Taimitsu (Tendai Tantric Buddhist) sources. This consecration encapsulates the Tantric approach to ultimate realization through distinctive practices of body marking and self-consecration. While the ritual has frequently been characterized as heterodox, an expansive reading of Taimitsu sources suggest continuity with established continental practices, underscoring the necessity of reconceptualizing Japanese Tantric Buddhist history within a broader trans-regional framework.
École française d'Extrême-Orient (EFEO)
Italian School of East Asian Studies (ISEAS)
29 Kitashirakawa, Bettō-chō, Sakyō-ku, Kyoto, 606-8276 Japan
CONTACT | Tel. 075-701-0882 E-mail efeo.kyoto@efeo.net
ISEAS WEBSITE | https://iseas-kyoto.org
This hybrid lecture will be held on site and via Zoom. Registration required in advance via QR code.
Zoom meeting ID: 854 6708 4761
CO-HOSTED BY Institute for Research in Humanities, KYOTO UNIVERSITY

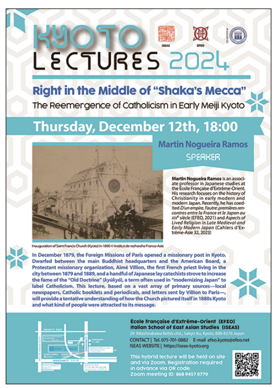

中日の近代哲学・思想の交差とその実践 第十一回共同研究会
西田幾多郎没後八十周年記念シンポジウム
2025年は戦後80年であり、ちょうど西田幾多郎没後80周年に当たる。本シンポジウムはこれを契機に、「越境する知としての西田哲学」というテーマを設定して、西田幾多郎没後80周年記念シンポジウムを開催することを通じて、西田哲学と現代社会とのかかわりを考察しつつ、その哲学の学際的な性格やさまざまなポテンシャルを模索しようと試みるものである。
登壇者：藤田正勝（京都大学）
浅見洋（西田幾多郎記念哲学館）
福家崇洋（京都大学）
秋富克哉（京都工芸繊維大学）
太田裕信（愛媛大学）
張政遠（東京大学）
広瀬一隆（京都府立医科大学）
嶺秀樹（関西学院大学）
杉村靖彦（京都大学）
フォンガロ・エンリコ（南山大学）
有坂陽子（ヒルデスハイム大学）
中嶋優太（石川県立看護大学）
郭旻錫（京都大学）
廖欽彬（中山大学）
日　時：2025年1月25日（土）10：00−18：20
場　所：京都大学大学院人間・環境学研究科棟地階大講義室
主　催：京都大学人文科学研究所
京都大学大学院人間・環境学研究科学術越境センター

人文研アカデミー 2024 シンポジウム
小杉亮子
学生運動の「その後」
――1960年代から1980年代まで
Chelsea Szendi Schieder
Christopher Gerteis
ニューレフトは誰と闘ったのか？
――日本管理社会とポスト70年の抵抗
WHO DID THE NEW LEFT FIGHT AGAINST?
JAPANESE CONTROLLED SOCIETY AND RESISTANCE AFTER 1970
William Andrews
内ゲバと「敗戦」
安藤丈将
「ニューレフト運動と市民社会」再考
福家崇洋
革命と文化
Mahon Murphy
Till Knaudt
小堀　聡
2024年11月30日（土）
10時30分〜17時30分｜対面にて実施
京都大学人文科学研究所4階 大会議室
言語：日本語・英語
［主催］
京都大学人文科学研究所
［共催］
京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター
問い合わせ：京都大学人文研アカデミー
Tel. 075-753-6902
e-mail. z-academy@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp

京都大学人文科学研究所　公開国際シンポジウム
語り得ぬものを語る
―グローバル時代の禅の言葉と翻訳
10：00〜12：10　基調講演
●出口康夫（京都大学）「語り得なかったものを語る：道元の『真なる自己』のトロープ解釈」
●龔儁（広州/中山大学）「宋代文字禅の思想史的分析」
司会：古勝隆一（京都大学）
通訳：土屋太祐（新潟大学）
13：10〜15：15　翻訳・道元・東アジア哲学
●Wittern, Christian（京都大学）「道元を英訳する」
●上原麻有子（京都大学）「翻訳を哲学する―西田哲学における言語化の問題に基づいて」
●齋藤智寛（東北大学）「馮友蘭の哲学における禅」
コメント＆質疑応答：石井清純（駒澤大学）、氣多雅子（京都大学）、山田俊（熊本県立大学）
司会：水野友晴（関西大学）
15：35〜17：50　言葉・禅解釈の諸相
●柳幹康（東京大学）「永明延寿による仏教の再編：禅による教・律・浄土の捉え直し」
●長野邦彦（お茶の水女子大学）「道元における言語の位置づけと体用論批判について」
●佐久間祐惟（東京大学）「虎関師錬の禅思想における言葉」
コメント＆質疑応答：土屋太祐（新潟大学）、頼住光子（駒澤大学）、和田有希子（早稲田大学）
司会：石井公成（駒澤大学）
総評：末木文美士（国際日本文化研究センター）
閉会の挨拶：何　燕生
18：30〜懇親会（会費制）
申込み不要
聴講無料
2025年2月15日
10時〜17時50分
京都大学人文科学研究所分館（北白川）
主催：京都大学人文科学研究所
お問い合せ：京都大学人文科学研究所　総務課　Tel：075-753-6902（平日 9:00〜17:00）

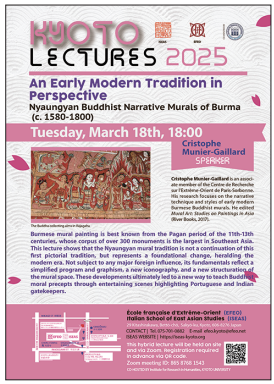
美しい暮しの手帖
第一号
人文研アカデミー
2024
市民共創セミナー
［司会］
藤原辰史（人文研）
［登壇者］
難波達己（暮しの手帖社）雑誌『暮しの手帖』の歴史
西川和樹（同志社大学）『暮しの手帖』と料理
菅原百合絵（人文研）花森安治の戦争詠
瀬戸口明久（人文研）『暮しの手帖』の商品テスト
森谷理紗（人文研）戦争中の暮しの記録について
［コメント］
福家崇洋（人文研）
小堀　聡（人文研）
［挨拶］
横山泰子（暮しの手帖社 代表取締役社長）
「暮しの手帖」の理論と実践
2025年2月8日（土）
13時開場　13時30分開演　18時終了予定
京都大学人文科学研究所本館
大会議室＋ZOOMウェビナー
［会場参加者は事前申込不要。
オンライン参加の方は要事前登録］
オンライン参加
［主催］京都大学人文科学研究所
［共催］暮しの手帖社、人文情報学創新センター
［問い合わせ］京都大学人文研アカデミー
Tel. 075-753-6902
e-mail. z-academy@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp
読者の方へのお願い

二月


KYOTO LECTURES 2024
ISEAS
EFEO
Right in the Middle of "Shaka's Mecca"
The Reemergence of Catholicism in Early Meiji Kyoto
Thursday, December 12th, 18:00
Martin Nogueira Ramos
SPEAKER
Martin Nogueira Ramos is an associate professor in Japanese studies at the École Française d'Extrême-Orient. His research focuses on the history of Christianity in early modern and modern Japan. Recently, he has coedited D'un empire, l'autre: premières rencontres entre la France et le Japon au XIXe siècle (EFEO, 2021) and Aspects of Lived Religion in Late Medieval and Early Modern Japan (Cahiers d'Extrême-Asie 32, 2023)
Inauguration of Saint Francis Church (Kyoto) in 1890 © Institut de recherche France-Asie
In December 1879, the Foreign Missions of Paris opened a missionary post in Kyoto. Dwarfed between the main Buddhist headquarters and the American Board, a Protestant missionary organization, Aimé Villion, the first French priest living in the city between 1879 and 1889, and a handful of Japanese lay catechists strove to increase the fame of the "Old Doctrine" (kyūkyō), a term often used in "modernizing Japan" to label Catholicism. This lecture, based on a vast array of primary sources—local newspapers, Catholic booklets and periodicals, and letters sent by Villion to Paris—, will provide a tentative understanding of how the Church pictured itself in 1880s Kyoto and what kind of people were attracted to its message.
École française d'Extrême-Orient (EFEO)
Italian School of East Asian Studies (ISEAS)
29 Kitashirakawa Bettō-chō, Sakyō-ku, Kyoto, 606-8276 Japan
CONTACT | Tel. 075-701-0882 E-mail efeo.kyoto@efeo.net
ISEAS WEBSITE | https://iseas-kyoto.org
This hybrid lecture will be held on site and via Zoom. Registration required in advance via QR code.
Zoom meeting ID: 868 9457 0779

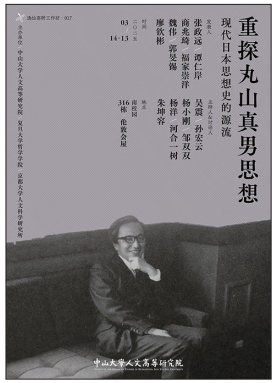
十二月

第21回シンポジウム
ブラフマニズムとヒンドゥイズム
インド思想史における
ヒンドゥー法典の意義
2025
3/28
13:00～18:00
京都大学文学部校舎2階
第3講義室
参加無料
会場・オンライン 同時開催
事前参加登録も受付しています
https://forms.gle/ZFMGPTNNNNNNNNNN
https://www.kyoto.u.ac
mail: yo1984@mail.ryukoku.ac.jp


KYOTO LECTURES 2025
An Early Modern Tradition in Perspective
Nyaungyan Buddhist Narrative Murals of Burma
(c. 1580-1800)
Tuesday, March 18th, 18:00
Cristophe Munier-Gaillard
SPEAKER
Cristophe Munier-Gaillard is an associate member of the Centre de Recherche sur l'Extrême-Orient de Paris-Sorbonne. His research focuses on the narrative murals of the Pagan period, and on early Burmese Buddhist murals. He edited Mural Art: Studies on Paintings in Asia (Rue Bosio, 2015).
The Buddha subduing alms-e-Nagaths
Burmese mural painting is best known from the Pagan period of the 11th-13th centuries, whose corpus of over 300 monuments is the largest in Southeast Asia. This lecture shows that the Nyaungyan mural tradition is not a continuation of this first pictorial tradition, but represents a foundational change, heralding the modern era. Not subject to any major foreign influence, its fundamentals reflect a simplified program and graphism, a new iconography, and a new structuration of the mural space. These developments ultimately led to a new way to teach Buddhist moral precepts through entertaining scenes highlighting Portuguese and Indian gatekeepers.
École française d'Extrême-Orient (EFEO)
Indian School of East Asian Studies (IHEAS)
CONTACT | Tel. 075-705-5082 | E-mail: ehesky@yahoo.fr.net
IHEAS WEBSITE | https://www.iheas.kyoto.jp/
This lecture will be held on site and no prior registration required. Please visit the EFEO Zoom meeting ID: 893 3705 1343
CO-HOSTED BY Institute for Research in Humanities, KYOTO UNIVERSITY

岡田暁生教授
退職記念講演会
講演 岡田暁生（京都大学人文科学研究所教授）【会場参加】+【オンライン】
音楽研究は大学教育の対象たりうるのか？
——その「実用性」を考える
2025年3月6日(木)
15時0分～17時10分（開場 14時30分）
京都大学人文科学研究所 大会議室
【司会】大橋 隆（京都大学人文科学研究所）
【会場参加】参加申し込み不要。先着順
【オンライン】講演記録のリンクから事前登録を お願いします
https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp

シンポジウム
近代京都、周縁からの創造
2025年3月20日(木・祝)
13時～17時10分（予定）
（12時40分開場）
京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール（入場に一本橋）
主催：京都大学人文科学研究所 共同研究「近代日本の都市と文化」研究班
近代天皇論 生命
近代日本の歴史散歩
【発表者】
高木 博志 「周縁の文化史－学問・芸能・遊廓」
谷川 穣 「維新と都－京都の場合」
田中 智子 「京の女子教育史－「高嶺」な学びの射程」
福家 崇洋 「河上肇と転向問題」
【お問い合わせ】
京都大学人文科学研究所 総務課
FAX: 075-753-6002 TEL: 075-753-6002
https://www.iheakyoto.u.ac.jp
入場無料
事前申込不要


重探丸山真男思想
現代日本思想史的源流
文化人類学
張政遠 趙仁岸 孫安弘
商英陸 福家崇洋
魏作郁 郭晶晶
廖依彤
人文科学
杨潮 邹双双
杨小刚 何合一桐
朱坤容
03 14 13
月 日 土
中山大学人文高等研究院

Institute for Research in Humanities
KYOTO UNIVERSITY

人文研アカデミー2024
シンポジウム
対面×オンライン
落語と学問する！
多種多様な問題がうごめく豊穣な落語の世界
落語から出発し、落語に寄り添いつつ
考えるアマチュアリズムの実践！
「落語と学問する」刊行記念シンポジウム
鈴木 亘 東京大学文学部
落語の二つの近代 ―八代目三遊亭圓生と八代目林家正蔵の「芸と思想」摂取から
足立 結衣 名古屋大学文学部
落語の近代化？ ―三遊亭円朝「名人長二」とモーパッサン
角屋 宝信 同志社大学言語学部
表現技巧を巡における落語と映画 ―「長屋もの」、「五稜もの」、そして「幕末太閤噺」
中田 健太郎 神戸市立須磨学園高等学校
「与太郎のオートフィクション ―シュルレアリスム研究から考える
池野 拓哉 ブックハーム書店
演芸としての語り ―談志落語のライブ性
櫻井 一成 日本大学文理学部
落語と「の音楽
コメンテーター 藤原 清文 京都大学人文科学研究所
神田伯山・一門 高木 博志 京都大学人文科学研究所
『思想と学問する』（岩波書店・本体2,800円）
2025年
3月20日(木)
14:00～17:00 入場・対面無料
京都大学人文科学研究所 本館4階 大会議室
オンライン参加申込
https://www.zoom.kyoto-u.ac.jp

第20回京都大学人文科学研究所 TOKYO 漢籍 SEMINAR
東アジアのなかの
『論語』
CONFUCIUS
「論語」伝播の諸側面
京都大学人文科学研究所 教授 小田切 一
西夏語訳「論語全解」について
―漢文化への時間
京都大学人文科学研究所 教授 池田 巧
平賀晋民の『論語』考察
―国語一門に対する自覚を めぐって
関西大学関東大学研究所 教授 金 培懿
2025
3.17[月] 10:30 16:00
参加無料 申込不要
会場：京都大学人文科学研究所 本館4階 大会議室
京都大学人文科学研究所附属人文情報学研究センター
TEL: 075-753-6002 FAX: 075-753-6002
E-mail: kyoken@mail.zinbun.kyoto-u.ac.jp
URL: https://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/
主催：京都大学人文科学研究所附属人文情報学研究センター
ご詳しくは裏面をご覧ください。

彙　報〈二〇二四年四月より二〇二五年三月まで〉

おくりもの

。呉孟晋准教授は、第四十六回サントリー学芸賞（芸術・文学部門）を受賞（二〇二四年十二月九日）

。呉孟晋准教授は、第三十五回倫雅美術奨励賞（美術史研究部門）を受賞（二〇二四年十二月十二日）

訃報

。前川和也名誉教授（八十三歳）は、九月十二日逝去。

。藤井正人名誉教授（七十歳）は、十月十一日逝去。

。礪波護名誉所員（八十八歳）は、十一月十三日逝去。

。今井清元講師（一〇五歳）は、十二月十五日逝去。

人のうごき

。岩城卓二教授（人文学研究部）を当研究所長に併任（二〇二三年四月一日〜二〇二五年三月三一日）

。池田巧教授（東方学研究部）を副所長に併任（二〇二三年四月一日〜二〇二五年三月三一日）

。森本淳生教授（人文学研究部）を副所長に併任（二〇二三年四月一日〜二〇二五年三月三一日）

。岩城卓二教授（人文学研究部）を附属人文情報学創新センター長に併任（二〇二三年十月一日〜二〇二五年三月三一日）

。石川禎浩教授（東方学研究部）を附属現代中国研究センター長に併任（二〇二四年四月一日〜二〇二五年三月三一日）

。石井美保准教授は、教授（人文学研究部）に昇任（二〇二四年四月一日付）。

。須永哲思は、准教授（人文学研究部）に採用（二〇二四年四月一日付）。

。李英美は、助教（人文学研究部）に採用（二〇二四年四月一日付）。

。劉冠偉は、助教（東方学研究部）に採用（二〇二四年四月一日付）。

。森谷理紗は、特定准教授（人文学研究部）に採用（二〇二四年八月一日付）。

。浅井佑太は、准教授（人文学研究部）に採用（二〇二四年十月一日付）。

。冨山一郎は、客員教授（文化研究創成研究部門、二〇二二年四月一日〜二〇二五年三月三一日）

。岩尾一史は、客員准教授（文化研究創成研究部門、二〇二三年四月一日〜二〇二六年三月三一日）

。MARQUET, Christophe Michel は、特任教授（二〇二二年五月一日〜二〇二五年三月三一日）。

。KNAUDT, Till 准教授（人文学研究部）は、退職（二〇二五年二月二八日付）

。岡田暁生教授（人文学研究部）は、定年により退職（二〇二五年三月三一日付）

。高木博志教授（人文学研究部）は、定年により退職（二〇二五年三月三一日付）

。白須裕之助教（東方学研究部）は、定年により退職（二〇二五年三月三一日

付）

海外での研究活動

。稲葉穣教授（東方学研究部）は二〇二四年三月三一日関西発、ヴェネツィア大学においてイタリア・パキスタン考古調査隊の資料調査と出土文物に関する共同研究・公開講演を行い、ナポリ大学においてイタリア・アフガニスタン考古調査隊収集写真資料の調査研究、出土文物に関する共同研究と公開講演を行い、ローマ大学、ローマ国立中央図書館において旧IsIAO（イタリア国立アフリカ東洋研究所）図書館所蔵資料と写真の調査を行い、二〇二四年六月二六日帰国。

。稲葉穣教授（東方学研究部）は二〇二四年九月八日関西発、オクスフォード大学／ボドレアン図書館においてBalkh Project収集考古資料アーカイブの調査・写本調査研究を行い、フランス国立極東学院／ギメ東洋美術館／CNRSにおいてフランス・アフガニスタン考古学派遣団資料の調査研究を行い、ローザンヌ大学において学術講演・アフガニスタン古代史に関する共同研究を行い、オーストリア科学アカデミー・イラン学研究所、考古学研究所貨幣研究部においてアフガニスタン中世史に関する学術講演・貨幣学シンポジウムでの報告を行い、二〇二四年十二月十一日帰国。

。藤原辰史准教授（人文学研究部）は二〇二四年九月十五日関西発、ルール大学において博士課程学生の指導、研究発表、ワークショップに参加し情報収集を行い、ハイデルベルク大学において京都大学欧州拠点十周年記念イベントに参加し、情報収集を行い、フランス国立社会科学高等研究院においてアレクサンドラ・コビリスキ氏（フランス国立科学研究センター現代史部門主任研究員）とJ-InnovaTechプロジェクトの打ち合わせを行い、アムステルダム大学において「日本の学校給食の歴史」についての研究発表を行い、アムステルダム海洋博物館において東インド会社の食の輸入に関する調査を行い、イスタンブルの博物館や資料館などにおいて、第一次世界大戦の戦争技術、農業技術に関する資料収集を行い、二〇二四年十月二五日帰国。

。金智慧助教（人文学研究部）は二〇二四年九月二七日仁川発、ケンブリッジ大学において訪問研究およびケンブリッジ大学図書館・アジア中東アジア研究科図書室における資料調査を行い、大英博物館、SOAS図書館およびギャラリー、在英国日本国大使館、国立劇場などにおいて資料調査および劇場探訪・観劇し情報収集を行い、Opernhaus, Teatro alla Scalaなどの劇場、パリ・シテ大学において二代目左団次が西洋演劇研究や訪ソ公演に際して足を運んだ外遊地（おもに劇場）を見学すると同時に、パリで開催される日本文学関係のシンポジウムに参加し情報収集を行い、二〇二五年三月二九日帰国。

招へい研究員

。KRAMM, Robert　ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン准教授
ラディカルなユートピアン・コミュニティ：周縁からのグローバル・ヒス

トリー（一九〇〇年～一九五〇年）
（文化連関研究客員部門）
受入教員　KNAUDT准教授、藤原准教授
期間　二〇二四年四月一日～二〇二四年九月三十日

。HAYEK, Matthias Director of Studies（Professor）, École Pratique des Hautes Études
江戸時代前期の暦学と占術：『簠簋内伝』の注釈書を中心に
（文化生成研究客員部門）
受入教員　平岡准教授
期間　二〇二四年八月一日～二〇二四年十月三一日

。楊　瑞松　国立政治大学歴史系教授
中国近代思想文化史、中国ナショナリズム論、歴史における語りと文化越境
（文化連関研究客員部門）
受入教員　石川教授
期間　二〇二四年十月一日～二〇二五年三月三一日

。ILLOUZ, Jean-Nicolas　パリ第八大学教授
象徴主義時代における文学と諸芸術
（文化生成研究客員部門）
受入教員　森本教授
期間　二〇二四年十月四日～二〇二五年一月三日

招へい外国人学者

。楊　奎松　華東師範大学紫江学者
一九四九年以前の毛沢東の前半生とその思想についての考証
受入教員　石川教授
期間　二〇二三年一月一日～二〇二四年十二月三一日

。廖　欽彬　中山大学教授
中日の近代哲学・思想の交差に関する研究
受入教員　福家准教授
期間　二〇二四年一月一日～二〇二五年四月三十日

。王　家動　山東交通学院准教授
日本の社会文化
受入教員　菊地助教
期間　二〇二四年二月二日～二〇二五年一月三一日

。梁　麗玲　銘伝大学教授
仏教における護童信仰の日本での流伝と変容
受入教員　永田准教授
期間　二〇二四年四月一日～二〇二四年七月三一日

。PARK, Jong Phil　オクスフォード大学教授
東アジア美術史の研究
受入教員　呉准教授
期間　二〇二四年五月一日～二〇二四年六月三十日

。苗　潤博　北京大学副教授
日本蔵宋元史籍の再検討
受入教員　古松教授
期間　二〇二四年六月十一日～二〇二四年八月二五日

。林　韻柔　国立中正大学准教授
九世紀から十二世紀にかけての東アジア海域における人的ネットワーク
受入教員　倉本准教授
期間　二〇二四年六月二六日～二〇二四年八月二六日

。NOGUEIRA RAMOS, Martin José Joaquim François　フランス国立極東学院准教授

パリ外国宣教会の東洋布教研究
受入教員　平岡准教授
期間　二〇二四年七月一日～二〇二四年十月四日
。内田　純子　中央研究院歴史語言研究所研究員
京都大学所蔵の殷墟出土文物の調査
受入教員　向井准教授
期間　二〇二四年九月七日～二〇二四年九月二二日
。HØISÆTER, Tomas Larsen　Western Norway University of Applied Sciences 准教授
シルクロードの古代歴史とその役割
受入教員　FORTE 教授
期間　二〇二四年十月七日～二〇二五年六月三十日
。張　秀春　上海立信会計金融学院博物館講師
寧波商人の簿記に関する研究
受入教員　村上教授
期間　二〇二五年一月七日～二〇二六年一月六日
。DUCREY, Guy　ストラスブール大学教授
フランスのジャポニスム、国際的象徴主義――一九〇〇年の詩学に関する研究
受入教員　森本教授
期間　二〇二五年二月六日～二〇二五年五月五日
。宋　真　公州大学校准教授
秦漢時代の人的資源の管理と券書
受入教員　宮宅教授
期間　二〇二五年三月一日～二〇二六年二月二八日

外国人共同研究者

。BROWNING, Jason　インディアナ大学ブルーミントン校博士課程
Early Medieval Central Asian Buddhist Philosophy as Reflected in Early Japanese and Islamic Scholastic Traditions: Examining the Transmission of the Doctrine of Momentariness
受入教員　中西准教授
期間　二〇二二年八月二二日～二〇二四年八月二一日
。陳　詩蘭　江蘇省社会科学院歴史研究所助理研究員
東北アジアにおけるサンタン交易の盛衰
受入教員　古松教授
期間　二〇二三年十月一日～二〇二四年九月三十日
。VERDON, Noémie Claire　ローザンヌ大学 Maître assistante
七―十一世紀の中央アジア・南アジア史研究
受入教員　稲葉教授
期間　二〇二四年二月一日～二〇二四年四月十一日
。HOMAYUN, Shamin Paul　オーストラリア国立大学博士候補生
アフガニスタンと日本における文化記憶の共有：バーミヤーン、シルクロード、玄奘
受入教員　稲葉教授
期間　二〇二四年二月二六日～二〇二四年四月二五日
。呉　國聖　国立清華大学助理助教
京都所在の清朝初期史料の調査と研究
受入教員　中西准教授
期間　二〇二四年六月十一日～二〇二

四年九月一日

。李　志鴻

東アジア仏教に関する研究

受入教員　倉本准教授

期間　二〇二四年六月十五日～二〇二四年十二月十四日

。石　放　北京語言大学博士課程

内藤湖南と近代日中書道交流

受入教員　呉准教授

期間　二〇二四年九月一日～二〇二五年三月三一日

。涂　安然　カリフォルニア大学サンディエゴ校博士課程

大正時期日本と中国の美術交流と東洋美術の系譜

受入教員　呉准教授

期間　二〇二四年十月四日～二〇二四年十二月四日

研究生

。石垣　章子

漢訳仏典として位置付けられた疑偽経典の成立と思想の系譜

受入教員　船山教授

期間　二〇一八年四月一日～二〇二六年三月三一日

。陸　家振

近代長江流域日本人商会の発展と変遷

受入教員　村上教授

期間　二〇二三年九月十三日～二〇二四年九月三十日

。皮　艾琳

漢唐の墓葬図像配置に関する研究

受入教員　向井准教授

期間　二〇二三年十月一日～二〇二四年九月三十日

。王　依依

明清回儒思想と回民社会――葬儀文化の儒化を中心に――

受入教員　中西准教授

期間　二〇二三年十月一日～二〇二五年三月三一日

。李　奥

中古華厳経典文献研究：敦煌を中心に

受入教員　永田准教授

期間　二〇二三年十一月一日～二〇二五年一月三一日

。Thomas Newhall

Rewriting the Rules: The Vinaya School and the Study of Monastic Law in East Asia（戒律の再編成：律宗と東アジアにおける仏教法律の研究）

受入教員　船山教授

期間　二〇二四年四月一日～二〇二五年一月三一日

。山本　茂

漢訳諸文献からみた律蔵の研究

受入教員　船山教授

期間　二〇二四年四月一日～二〇二六年三月三一日

。Lola Bess SIMON

Legacies of Student Protest: History and Memory of Kyoto's Revolutionary Student Movement

受入教員　KNAUDT准教授、福家准教授

期間　二〇二四年九月八日～二〇二五年七月八日

。李　莞婷

華中国策会社集団と戦時華中占領地の経済社会

受入教員　村上教授

期間　二〇二四年九月十九日～二〇二五年九月十九日

。蘭　原
窺基の瑜伽行唯識派思想の哲学的、文献学的解明
受入教員　船山教授
期間　二〇二四年十月一日～二〇二五年九月三十日
。張　藍天
王明の政治史に関する研究
受入教員　石川教授
期間　二〇二四年十月一日～二〇二五年九月三十日
。ハンター・ウィンピー
徳川時代の祇園祭
受入教員　岩城教授
期間　二〇二五年二月十五日～二〇二六年一月十五日

人文情報学創新センター講習会

。二〇二四年度漢籍担当職員講習会（初級）
第一日（九月九日）
開講挨拶・オリエンテーション　岩城　卓二
漢籍について（四部分類概説を含む）　永田　知之
カードの取り方――漢籍整理の実践　楊　維公
第二日（九月十日）
工具書について　高井　たかね
漢籍関連サイトの利用　Wittern, Christian
実習を始めるにあたって　永田　知之
漢籍目録カード作成実習
第三日（九月十一日）
目録検索とデータベース検索　安岡　孝一
漢籍データ入力実習（一）
第四日（九月十二日）
和刻本について
（大学院文学研究科准教授）　池田　恭哉
漢籍データ入力実習（二）
第五日（九月十三日）
朝鮮本について　矢木　毅
実習解説　楊　維公
情報交換　安岡　孝一
終了挨拶　岩城　卓二
。二〇二四年度漢籍担当職員講習会（中級）
第一日（十月二八日）
開講挨拶・オリエンテーション　岩城　卓二
経部について　古勝　隆一
叢書部について　藤井　律之
叢書と漢籍データベース　安岡　孝一
第二日（十月二九日）
史部について　古松　崇志
漢籍データ入力実習（一）
第三日（十月三十日）
子部について　稲本　泰生
漢籍データ入力実習（二）
第四日（十月三一日）
集部について
（大学院人間・環境学研究科教授）　道坂　昭廣
漢籍データ入力実習（三）
第五日（十一月一日）
漢籍と情報処理　Wittern, Christian
実習解説　楊　維公
情報交換　安岡　孝一
終了挨拶　岩城　卓二

お客さま

。五月二五日　UCLA Library・アジア図書部門管理主任・程洪〔CHENG Hong〕
（石川、村上が対応した）

。六月十日　中国社会科学院近代史研究所・主任研究員・賈小葉　他七名
（石川、村上、箱田恵子教授（文）、小野寺史郎准教授（人環）が対応した）

。七月十六日　台湾　中央研究院近代史研究所・所長・雷祥麟
（石川、村上が対応した）

。八月三日　清華大学社会学系・主任、教授・應星
（石川が対応した）

。八月二四日　北京大学マルクス主義学院・副院長・宋朝龍　他十三名
（石川、村上が対応した）

。十月三十日　中共一大紀念館代表団・副館長・周峥　他四名
（石川が対応した）

。十一月五日　浙江大学芸術与考古学院（浙江大学中国古代書画研究中心・浙江大学芸術与考古博物館）・教授・陳野　他二名
（稲本、呉が対応した）

共同研究について

高木博志

人文科学研究所は共同研究が本務ゆえに、「職業としての共同研究」に悩みながらも充実して過ごした二七年間だった。

桑原武夫・林屋辰三郎といった「英雄時代」の人文研のごとく共同研究を特権化できるわけではなく、旧日本部の突出した諸先輩のような組織力もない。どこの大学でも共同研究が組織され、大型科研も多く走る。どこの職場も忙しくなって、土日であってもなかなか人文研に足を運んでもらうのが、難しい。そんな時代に人文研には予算もなく、基本、手弁当。

私のような凡庸な研究者は、ともかく事務局に徹することを心がけた。それは他の研究所の、ある先達の教えである。

全体テーマに沿ったメンバーの集まりは、きわめてあたりまえの了解である。共同研究でも個人研究でも同じだが、史資料に即したしっかりした実証、私が言うのもおこがましいが世界をつくりだす構想力、そして現代に向き合う問題意識である。史資料を見つけるのもオリジナリティであり研究力であると、お互いに尊重した。

文学・美術・建築・歴史などのそれぞれの分野のプロでありつつ、その学会コミュニティの中だけで議論するのではなく、学際的な人文学として一歩踏み出す普遍の姿勢である。自分の学会コミュニティの研究のみを引用し発信するのもNGである。

人文研の伝統として、書いたものだけで評価してきたことは大切だと思う。昔は手書きの卒論や修論のみを読み込んで助手人事をしたという。一方、私の時代には大学院の教育以上に、博物館・資料館・美術館におけるモノ・史料に取り組む現場に教育力を感じ、そこから個性的な研究者が多く出てきたと思う。

私の共同研究の特色は、①京都を中心とする歴史都市の研究にあり、観光言説の京都イメージを相対化し、政治・社会・文化・経済など総体としての地域社会を考察した。京都の平安朝イメージや祇園の舞妓像も二〇世紀の産物である。つねに既存の歴史像を相対化し、時代時代による構造的な変化に留意した。また民衆の生活・花街の性・差別といった周縁性にも着目した。旧日本部の林屋辰三郎は、戦後の歴史研究は「日本民衆の生活」の解明にあり、それには「地方・部落・女

性」をよりどころとすべきとした（『歌舞伎以前』岩波新書、一九五四年）。こうした視点は意識してきたつもりである。

②私の個人研究と密接に関わった近代天皇制の研究。その際、東京のような政治史主体ではなく、社会や人々の側から見直すこと、受容や実態の解明に重きを置いた。たとえば奈良の畝傍山周辺村の家々に日の丸がゆきわたるのは、明治天皇の大喪（一九一二年）が契機であった。③狭い文化史ではなく、政治・社会・教育・経済とも接点をもった文化史を目指した。それは仏文出身の飛鳥井雅道が、政治小説や天皇制の政治文化に取り組んだことにも影響をうけた。

月一回程度の例会を三～五年間積み重ねて、そのプロセスにおいて共同研究の特色を考えてきた。研究会では班員たちの自由な報告・討論にまかせたし、公開シンポジウムやフィールドワークもよくおこなった。仙台・金沢・熊本・呉・彦根・吉野や河内の南朝史跡・茨木キリシタン史跡・百舌鳥古墳群や神武陵洞部落跡・祇園や東山の周縁など、広沢池畔の沢乃家での花見は忘れられない。

共同研究のひとつの魅力は、新しい人とめぐりあうことであり、私自身の若いときもそうであったが、それがその後の財産になっている。

私の人文研共同研究会の軌跡は、「近代京都研究」班（共同主催、二〇〇三～〇五年、研究成果報告書：丸山宏・伊從勉・高木編『近代京都研究』思文閣出版、二〇〇六年）に始まり、次に「近代古都研究」班（二〇〇六～一〇年、高木編『近代日本の歴史都市―古都と城下町』、思文閣出版、二〇一二年）では、都に起源する古都と藩祖を顕彰する城下町という都市の歴史性に向きあった。「近代天皇制と社会」班（二〇一一～一六年、高木編『近代天皇制と社会』思文閣出版、二〇一八年）では、社会や人々の側から天皇制を捉えようとした。再び京都をテーマとし、「近代京都と文化」班（二〇一七～二一年、高木編『近代京都と文化―「伝統」の再構築』思文閣出版、二〇二三年）において、広義の文化（政治・社会との接点を考える）を切り口に近代京都をめぐる学際的で批判的な研究をめざした。最後に現在、編集に入っているのが「近代日本の宗教と文化」班（二〇二二～二四年）である。

また『人文学報』にも積極的に寄稿し、「近代都市の諸相」「日清戦争と東学農民戦争」「近代京都と文化」の特集号を編んだ。京都研究は、Edited by John Breen, Maruyama Hiroshi, Takagi Hiroshi, *Kyoto's Renaissance: Ancient Capital for Modern Japan*, Renaissance Books, 2020 として、海外にも発信した。

個別論文の質とともに、全体としてテーマにまとまりがあり、ちゃんと売れる共同研究成果報告書をめざしたが、今後も学問としての生命力を少しはもちつづけてほしい。

主婦の戦争
——そのマジョリティ性と周縁性

林田敏子

二〇二二年度から始まった共同研究「人物からみる第二次世界大戦」が二〇二五年三月に終了する。この研究班は「第一次世界大戦の総合的研究」（班長：山室信一、岡田暁生　二〇一〇～二〇一三年度）の課題を引き継ぎつつ、終戦から八〇年を間近に控えた第二次世界大戦を「人物」に焦点をあてて再考することを目的としたものである。第二次世界大戦は第一次世界大戦以上に複合的な戦争であり、戦争に巻き込まれた国や地域を網羅しながら、その全体像を提示するのはきわめて困難である。そこで研究班では、特定の人物に着目することで新たな切り口や論点を提示し、通説的な大戦理解に何らかの修正を迫ることを目指した。班員の多くが第二次世界大戦そのものを主たる研究対象としてこなかったことも、多様な論点を抽出する上で効果的に作用したように思う。

準備運動を兼ねた最初の数回の研究会では、大戦の特徴をどう捉えるか、「人物からみる」という手法にどのような可能性と課題があるかといった大枠を議論するために、大戦の概要理解と論点整理をおこなった。その後、地域的、テーマ的な偏りをゲスト・スピーカーの招聘で補いながら知見を深め、共同研究の方向性が見え始めた二〇二四年六月には、人文研アカデミー二〇二四連続セミナー「第二次世界大戦再考」を四週にわたって開催した。最後は班員による怒涛の個別報告を積み上げ、全二一回の研究会を無事に終えることができた。

人物からみるという手法には、個人の考えや経験がどれほどの代表性を持ち得るかという偏りの問題がつきまとう。一般にはあまり知られていない人物、まして無名となればなおさらであろう。人の一生やそのコアとなる活動期は、開戦と終戦によって区切られた大戦という時間的な枠組とは必ずしも一致せず、また、戦争の主体となる国家という空間的な枠組とも完全に

重なるわけではない。終戦を待たずに命を落とした者、大戦後も長く影響力を保持した者、国と国の間で引き裂かれた者、逆に複数の国の架け橋となった者――有名、無名に関わらず、「人」と戦争の間には、必ず時間的、空間的な「ずれ」が存在する。三年間の共同研究を終えた今、この「ずれ」こそが、大戦を考えるときの様々な思考の枠組を揺さぶる契機を与えてくれたように思う。

共同研究の中で筆者が対象に選んだのは、政治家でも軍人でもなく、一人の平凡な主婦であった。戦争に直接的な影響を与えることがなかった無名の人物に着目することで、総力戦を支えた「社会」を、そのマージナルな部分から、すなわち、政府プロパガンダの単なる客体としてではない、主体性をもった個人の視点から再考したかったからである。筆者が取り上げたのは、ネラ・ラストという四九歳のイギリス人女性である。ネラは、「普通の人々」の考えや価値観を「世論」として形にすることを目的とした社会調査プロジェクト「マス・オブザベーション」に参加し、ダイアリストの一人として日々の出来事を日記に綴って提供し続けた。大戦期だけで二〇〇万語を超える彼女の日記は、単なる戦争の記録ではなく、「能動的な市民」として社会に参画することで自らの居場所を求めようとする一人の女性の闘争の場でもあった。

家族の死に見舞われることも、極度の窮乏にあえぐこともなかったネラの戦争は、実は戦勝国の比較的恵まれた主婦の経験としてはきわめて典型的なものであった。一方で、子育てを終えた中年女性でもある彼女は、若さを原動力とする戦時貢献の機会から疎外されており、その意味で戦争からもっとも遠い場所に位置していた。戦争中であっても、人は戦争「だけ」を生きるわけではない。ネラの日常は空襲、食料調達、灯火管制の影響を強く受けてはいたものの、日々の暮らしのなかで感じた小さな喜び、悲しみや不安から自らの内面に深く入り込んでいく語りのパターンが、戦争を超越した思考の空間を創り出している。ネラの日記から浮かび上がるのは、家族、コミュニティ、社会、そして戦争との関係の中で、自らを位置づけ、意味づけようとする一人の人間の戦いである。ホロコーストへの言及がわずか数行しかないネラの日記は、大量虐殺や飢餓に特徴づけられる大文字の大戦史とどうつながっているのか。平凡な主婦がもつマジョリティ性と周縁性のなかに、今もその答えを探し続けている。

研究班が発足したのは、ロシアによる本格的なウクライナ侵攻が始まって数か月が経過した時期で、当時は、三年後も戦争が続いていることなど想像もできな

かった。過去の戦争は現実の戦争と呼応しながら参照され、呼び覚まされ、新たな意味を付与される。第三次世界大戦の可能性が皆無とはいえない状況の中、第二次世界大戦の意味を問い直すことの重要性は益々高まっていると言えよう。

今後、共同研究の成果として、人文研アカデミーの連続セミナーを基にした共著や、人物に焦点をあてた単著のシリーズが刊行される予定である。各回の報告レジュメを読み返し、共同研究の成果が形となる未来を思い描きながら、その一端を担えることに大きな喜びを感じている。最後に、定期的に研究会に参加し、共同研究を支えてくださった班員の皆様、ゲスト・スピーカーの皆様に深く感謝申し上げたい。

四十三年ぶりの禅研究班

何　燕生

研究班は「語り得ぬものを語る行為とその思想表現に関する学際的研究―禅の言葉と翻訳を中心課題として―」という課題名で二〇二二年度にスタートした。長い課題名となっているが、内容的には禅研究を主旨としたものであり、そのため、発足当初から「禅研究班」と称して実施してきた。

実は人文研で禅をテーマとする研究班の発足は一九七九年の、柳田聖山氏を班長とする「禅の文化」研究班が最初のようである。本研究班はそれ以来のことであり、なんと四十三年ぶりである。

柳田聖山氏の「禅の文化」研究班と並べて語るのは畏れ多いことであり、とても同列にできないが、本研究班について簡単に紹介すると、道元の『弁道話』をテキストとした読書会と、班員による研究成果の報告会という二本柱で、午前の部と午後の部に分けて丸一日をかけて実施するという内容のものであった。

『弁道話』は漢文から和文へと転換する起点となった道元の最初の作品である。『弁道話』を会読のテキストに選んだのは、道元が中国の禅の言葉をどのように日本語化したのか、という本研究班の課題である「翻訳」の問題を考えるために格好の材料であると考えられるからである。

二〇二二年はコロナの規制がまだ緩和されておらず、マスクをつけたままで自己紹介した班員が多かった。そのため、研究会の実施は対面とオンラインというハ

イブリット形式を余儀なくされたが、海外の班員もリアルタイムでオンラインで参加することができたため、海外在住の班員からの参加や発表、コメンテーターでの協力や交流が可能になり、国際色豊かな研究会となった。また、班員の顔ぶれは哲学、言語学、仏教学、中国思想、日本思想史、比較文化論、翻訳論などの分野から構成され、それぞれの分野からの検討が試みられたことも学際的研究を目指す本研究の趣旨がひとまず達成されたと考える。

研究会は年に五、六回程度で実施したが、毎回の午後の報告会では二発表を設け、それぞれにコメンテーター、司会者を配置して行うという学会形式を取った。それにより、三年間で多くの班員がそれぞれいずれかの形で研究会に参加することができた。また、毎年度に研究班の活動の一環として、国内外の学術活動に参加したことも本研究班の大きな実績であったと考える。具体的に言うならば、一年目にブリティッシュ・コロンビア大学とイェール大学が共同開催した禅関係の国際シンポジウムで班員六名が発表するとともに、それぞれの論文が英語と中国語に翻訳され、海外の学術誌もくしは論文集に掲載された。二年目には東京外大で開催された日本宗教学会学術大会でパネルを企画し、班員5名が発表した。三年目には岩波書店の『思想』（一二〇五号）に「道元の思想」という特集を企画し、班員十一名が寄稿した。そして、最終年度にあたり、二〇二五年二月十五日に、北白川にある人文研の分館を会場に、「語り得ぬものを語る—グローバル時代の禅の言葉と翻訳」という公開国際シンポジウムを開催し、海外からの招聘班員、並びに国内の班員を含め、四十名が参加し、議論を交わした。歴史的な建造物での開催はもちろん、充実した内容の発表、コメント、質疑応答を行ったこと、これをもって研究班の有終の美を飾るには余るものがあり、まさに盛会であった。

この文章を書くにあたり、柳田聖山氏の研究班の当時の様子が気になり、調べてみたところ、「言、典ニ関ワラザルハ君子ノ所談ニアラズ」（『人文』第二四号、一九八〇年十二月—一九八一年五月）という一文に出会った。研究班を終えるにあたり、柳田氏がもっとも印象に残ったことは、出典を調べることが文献会読の基本的な態度だったということのようである。当たり前のことと思われるかもしれないが、「出典調べに手間がかかりすぎた。出典のないことの確認は、あることの確認以上に手間がかかる」と柳田氏が指摘しているように、実は大変な作業であった。諸橋大漢和が主流の工具書であった時代に比べ、デジタル時代の今日では数多くの検索エンジンが利用できるようになり、

しかも出典の原文をリアルタイムでそのまま確認できるという状況になったのは有り難いことだが、そのお陰で膨大な量の情報が検出され、それらを前に、どちらを取るべきか、逆に取捨選択に新たな課題をもたらしていることも事実である。消化不良のままであってはいけないし、かと言って、コンテキストを理解せずにそのまま引用してもいけないからである。時代が変わり、便利になったとは言え、本に向き合う姿勢は基本的に変わっていないことを実感した三年間である。

本研究班は『弁道話』の言葉調べに際し、基本的にSAT大正新脩大藏經テキストデータベースおよび台湾のCBETAを中心に使用したが、中国本土の「学衡学拠」（http//www.xueheng.net/）に収録されている「四部叢刊」「文淵閣四庫全書」「正統道蔵」のデータベースおよび海外開発の「中国哲学書電子化計画」も可能な限り活用させてもらった。出典の調べに確かに手間がかかったが、そのお陰でこれまで確認できなかった新しい事柄がたくさん判明した。例えば『弁道話』の中に、真言密教や天台、華厳、浄土などの分野の言葉が数多く使われていること、また、永明延寿の『宗鏡録』や栄西の『興禅護国論』にしか見られない用語が『弁道話』に登場していること、『弁道話』の文体は韻文スタイルに近いこと、明清時代の仏教文献にしか確認できない言葉が『弁道話』に見られること、などである。まさにデジタル時代ならではの収穫と言える。『弁道話』の成立を考える場合、それらが大変重要であることは言うまでもない。他方、道元にしか見出せない表現がたくさん確認されたことも大きな成果であった。そうした道元の造語をどう考えるのかも今後の課題となろう。

研究班の最終成果はこれから報告書、論文集などの形で刊行することになるが、実りの多い三年間であったことを強調しておきたい。私個人にとって、毎回の会読のレジュメの作成と発表は本当に至福の時間であった。それらを通じて、人文研の「会読」という素晴らしい共同研究の伝統の一端に触れさせていただいたことは、大きな収穫であった。「語り得ぬもの」を語るのは、実に楽しいことである。

最後となったが、研究班の運営と実施について副班長のウィッテルン・クリスティアン先生、所内班員の古勝隆一先生には多大なご尽力をいただいたことをとくに述べたい。「志合者、不以山海為遠」という『抱朴子・博喩』の言葉がある。誠にその通りである。分野が異なっていても、志を同じくする両先生のお支えがあったからこそ、本研究班が無事に終了することができた。両先生には満腔の敬意と謝意を表したい。

「教育」と「社会運動」の隙間、あるいは接合点

――研究対象としての京都人文学園――

奥村旅人

課題公募班（萌芽研究）「社会運動と社会教育の関係史―一九三〇-四〇年代の京阪地域に焦点を当てて―」は、二〇二四年四月から二〇二五年三月までの一年間開催された。班員は、福家崇洋氏と須永哲思氏、そして筆者の三名である。主に、京都勤労者学園が所蔵する京都人文学園（一九四六―一九五六）関係資料の整理と分析を行ってきた（当該資料については、『人文學報』一二二号の小特集「戦後京都と教育・文化運動――京都人文学園を中心に――」をご参照いただきたい）。

京都人文学園とは、一九四六年に創設された三年制の「各種学校」である。新村猛や住谷悦治を中心として設立され、新村や久野収など、当時京都に在住していた知識人たちが講義を行った。開校当初は一〇〇人以上の入学者を集めたものの、やがて新学制が整備されていくのに伴って「学生」の数を減らし、一九四九年からは夜間制に移行、一九五七年には京都勤労者教育協会との合併によって京都勤労者学園へと改組し、現在に至っている。

研究対象としての京都人文学園の特徴の一つは、その位置づけの難しさにある。同学園はその名の通り教育機関としての一面を有しており、戦後京都の知識人たちが講義を行う「学校」であった。他方、その知識人たちが様々な社会運動を展開するなかで創立されたものであるという点に着目すると、同学園の創立と運営は社会運動としての一面を有してもいる。

教育機関として見れば、京都人文学園は先述の通り「各種学校」に当たる。各種学校は確かに「学校」ではあるが、戦前期の学制においても、一九四七年度以降の新教育制度においても、初等教育から高等教育に至る「正規の」教育システム―学校教育法の第一条に定められていることから「一条校」と通称される――の中に位置づいてはいない。むしろ各種学校とは、何らかの理由で一条校に位置づけられ得ない「学校」の総称であるとも言える。故に、京都人文学園は学校教育史研究で主題的に取り上げられることはほとんどない。

一方で、学校教育以外の教育を扱う社会教育学の領域で頻繁に扱われるかと言えば、実はそうでもない。

「一条校」でないとはいえ、各種学校は学校教育法上の位置づけを持っているため、「社会教育行政」が管轄する教育活動を主な研究対象としてきた社会教育研究の側から見れば、各種学校はおそらく「学校」であり過ぎる。山嵜雅子氏が昼間部時代の京都人文学園を扱っている例（『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』風間書房、二〇〇二年）などを除けば、京都人文学園は社会教育史の領域で言及されることもほとんどない。

では、社会運動としての側面に着目して見たとき、知識人たちの諸運動を扱ってきた社会運動史研究の領域で取り上げられるかと言えば、これまたそうでもない。労働組合運動や社会主義運動、無産政党運動などの経済／政治運動に比べると、教育や文化に関わる運動は周縁的なテーマと目されるのか、研究者の関心を集めにくい。京都人文学園は、各領域の「隙間」にある「学校」であると見ることができるだろう。筆者は、このような京都人文学園を具に分析することで、教育史や社会運動史に新しい角度から光を当てることはできないかという意図を持ちつつ、調査・研究に取り組んできた。

班員による資料分析の作業は、先述の『人文學報』一二二号小特集で一旦研究経過を報告した後、現在も継続して進められている。筆者について言えば、小特集では京都人文学園で講義を行っていた知識人たちが、いかなる社会運動に参画していたのか、その全体的な傾向を把握しようとした。先に述べた（学校・社会）教育史研究と社会運動史研究との「隙間」を埋め、「接合点」を模索する試みではあったが、結局は講師陣の変遷を追っただけの基礎作業にとどまった。今後は「各種学校」という教育機関としての位置に関する検討を通して、学校教育史と社会教育史との「接合点」を模索することも視野に入れつつ、さらに作業を進めていかなければならない。二〇二四年度末をもって研究班の活動自体は終わりを迎えるが、この間整理した資料群とはこの後も永く向き合っていく所存である。

末筆にて失礼ながら、京都人文学園関係研究にご助成いただいたこと、また研究班を組織する機会を頂戴したことに心から御礼申し上げたい。先日あるシンポジウムで、共同研究を通して得た研究者とのつながりは「宝」であるという旨の言葉を拝聴した。班員のお二人には、この間他の研究会にお誘いいただいたり、研究上のご相談をさせていただいたりとお世話になること頻りである。このような「宝」を得たことに感謝しつつ、引き続き京都人文学園研究を進めていきたい。

あえて「乞うご期待」の言葉を活字にして、共同研究の報告を終えようと思う。

百足の思考

冨山一郎

二〇二三年の初頭に直野章子さんと立木康介さんから、共同研究「家族と愛の研究会」の班長になってほしいと相談された。「無茶ぶりだ」と戸惑いながらも、「悪乗りしよう」と決めた。その悪乗りを支えたのが、鶴見俊輔や北沢恒彦たちがつくった「家の会」という存在だ。この会は、一九六二年一月二一日、京都四条河原町の「大原女家」という甘味処ではじまり、四〇年も続いたという。毎月の例会と年に一度の合宿を行いながら、『家』という機関紙を刊行していた。また「家の会」の「家」とは、家族であり家制度であり家という生活空間であり家産であり、「家」という字が付くあらゆることがとりあげられたようだ。また一九六〇年の安保闘争後の政治空間への問いが、そこにはあったと私は思っている。この「家の会」への興味と共同研究「家族と愛の研究会」が重なり、おもしろそうだということで班長を引き受けた。

ここでいう「おもしろい」ということの要点は、研究対象としてというより、家族や愛を語ることのおもしろさといった方がいいかもしれない。この「家の会」の四〇年の活動を総括的に語ることはできないが、一九七三年の『思想の科学』（23号）ではこの「家の会」をめぐる特集が組まれている（一九八一年7月にも同様の特集が組まれている）。この特集にある鼎談「「家の会」とは何か」（鶴見俊輔／北沢恒彦／笠原芳光）で鶴見俊輔は、「家の会」で語ることを次のように述べている。

> 無意識の習慣として続けていけば非常に強固に続くものを、百足（むかで）がどういうふうにして歩くのかと考えたら歩けなくなった、という話があるのだけれども、そういう違和感が生じて、かえって家というものの円満な交通というものが妨げられるということがありますね。だから、われわれが無意識としてしまっておけばよいものをしまっておかないことによって、平地に波乱を起こすということが確かにあると思うのですよ。

家は、それを対象として論じる以前に、私たち一人ひとりに前提として張り付いている。また鶴見はそれを「無意識の習慣」というが、この「無意識」には注釈が必要である。張り付いている家を当たり前の前提として受け入れ、意識にも上らない人もいれば、日々の日常の中で張り付く家と交渉し、あるいは我が身を引きはがそうともがいている人もいるだろう。そして私が「おもしろい」の思うのは、鶴見がいうように、家を考えることが引き起こす混乱だ。見事に歩みを続けていた百足が歩けなくなり、足がもつれ、しだいに別の歩き方を模索し始めるかもしれない。家を思考すると、「平地に波乱」が起きるのだ。それは家族と愛においても同様だ。

予定調和的結論でおわる議論やマウントの取り合いに見える研究会に飽き飽きしていた私にとって、やはりこれはおもしろいと思った。共同研究「家族と愛の研究会」のメンバー構成は、社会学、歴史学、思想史、精神分析、臨床心理、法学、文学、映画論、フェミニズム、生命倫理、批判理論をはじめ、人文学の領域の多岐にわたる。一つ一つの報告内容についてはＨＰ(https://www.viedefamille.jp/) を見ていただきたいが、「家の会」と同様にこの研究会では、家族と愛にかかわるあらゆるテーマが議論された。またすべてではないが、「子ども」という領域が通奏低音のような問いとして底流にあったと思う。しかし研究会という場が確保したのは、こうした多様な研究分野の「学際的」研究や「総合的」研究といったよくある言葉で表現できることではない。

各々の研究テーマは多様であるが、研究会で展開されたのは、思考において「無意識の慣習」として自らに張り付いている家族や愛が引き出され、しだいに足がもつれ、別の歩き方を模索しながら、お互いが絡まりあっていくような思考だ。すなわち、百足の思考とでもいうべき営みが生まれたのである。足がもつれた百足は、容易には動き出せないだろう。この不可能性から始まる次の一歩を、研究会という場が担おうとしたのである。それは、一人では思考できないことが集団では可能になるかもしれないという、予感に満ちた場だ。だから議論は終わらない。それぞれが別の歩き方を試みながら、議論はエンドレスになり、繰り出された言葉たちの豊かな感触を保ちながら、懇親会へと流れていった。

こうした毎月の研究会で議論されたことを、ここで要約するのは難しい。また結論というより議論のプロセス自体が意味を持つのだろう。ただ全体を通して浮き上がったのは、家族や愛と無関係な領域などない、

ということだ。それは家族や愛が常に人という存在に張り付いているということにかかわるが、あえて付言すれば、すでに張り付いているにもかかわらず、それはある時突然、異なる相貌で顔を出す。

HPに掲載されている本研究会の「主題」は、「コロナ禍での外出自粛により、夫婦間・親子間の不和・虐待や、一人親家庭の経済的困窮があらためて浮き彫りになった」という文言から始まる。それは、何かのきっかけで家族や愛は、問題の焦点として浮かび上がるということだ。政治的危機であろうが自然災害であろうが、大きな危機が契機になり家族や愛がイシューとして焦点になる。そのとき求められるのは、危機とイシューの分析というより、家族や愛が常に既に私たちの存在に張り付いているということから、思考を始めることなのだ。

「主題」のこの冒頭にあるように、「コロナ禍」は、多くの困窮と見えにくい暴力を生み出した。そしてそれは終わっていない。問題は医学用語を纏って語られたことではないのだ。また「コロナ禍」をある専門分野のテーマにし、イシューとしてのみピックアップするような思考では、登場した困窮や暴力を結果的に追認することになる。そもそも「コロナ禍」という言い方自体、到来したウィルスという要因が何かを引き起こしたという定式であり、そこでの主人公はコロナである。だがはっきりしているのは、多くの困窮や暴力はコロナによる禍（わざわい）ではないということだ。私たちはそこに、家族と愛をすえた。問題は突然生じたのではない。そしてだからこそ、自らに張り付いている家族と愛を言葉にしながら、百足の思考を歩みだしたのである。

イシューとしてくくり上げることが現状の追認に結び付くという問題は、「コロナ禍」に限ったことではない。コロナであれ災害であれ、あるいは戦争であれ、出来事に群がる研究プロジェクトを見るたびにそう思う。問われているは原因究明や明快な解説ではなく、私たち自身の思考であり、研究そのものではないのか。確かに自身に問いを立てるのは難しい。それをひとりで行うのなら、足がもつれ動けなくなるのだが、それぞれが足をもつらせながらぶつかりあい、寄りかかりあう中で、別の歩みが生まれるのだ。実に楽しい研究会の経験だった。

「会読」という共同研究の「成果」

岩城卓二

所長の二年間（二三・二四年度）、人文研の共同研究が学内外有識者から「評価」されるために必要な書類を何度か書かねばならなかった。そのたびに毎年三〇課題以上も実施されている共同研究の目的、実施状況、著書・論文・史料註釈・翻訳書の内容と発表数を点検したが、質量ともに高レベルの共同研究が実施されていることに、改めて驚嘆させられた。

二三年度であれば、共同研究三二課題の班員数は学内三二九名・学外五七四名、研究会の総開催数は三六九回。参加者総数は五、九八〇名、内三五歳以下の若手研究者（大学院生を含む）は二、三九五名である。一回の研究会は報告・討論あわせて、だいたい三～五時間にも及ぶし、その後、飲み会で延長戦を繰り広げる研究班も少なくない。三六九回ということは、そんな研究会が、一年間、連日、開催されていたということになる。

人文研の共同研究は、「文化基盤の形成」、「地球社会と共存」、「接触とコンフリクト」という三つのコンセプトを意識して課題が設定されている。国家・民族をこえたグローバルな視点や、戦争・災害・環境・家族といった私たちが生きる現在との対話を重視しているが、すべての研究班に共有されているのは、「会読」の精神である。

「会読」とは、多人数が集まって一つのテキストを徹底的に読み込み、意味を確定していくことである。名誉教授の金文京さんによると、独りよがりの誤読を排し、まるで敵同士のように討論しながら、厳密に意味を確定していくのが「会読」であり、人文研の共同研究で、この「会読」がはじまったのは一九三五年のことである（「東方部の共同研究―本読み会」、『人文京都大学人文科学研究所創立八〇周年』）。

「会読」の伝統はいまも受け継がれ、多くの共同研究で中国古典に限らず、さまざまなテキストの「会読」が行われている。「会読」は、人文研のお家芸といってもよい。

この「会読」の成果は注釈書・翻訳書として結実するのだが、参加者にとって大切なのは、独りよがりの誤読を排し、まるで敵同士のように討論する時間なのだと思う。参加者が、年齢やキャリアに関係なく、対等な立場で討論する「会読」の精神こそが、継承すべ

き人文研共同研究班の伝統であり、それはテキストを読むことを主たる目的としない共同研究班にも共有されている。

人文研の共同研究がなければ出会うことも、ましてや一つの報告をめぐって討論することなどなかったであろう多分野の研究者が、「会読」の精神を共有して、激論を交わせることが、人文研の共同研究の最大の「売り」といってよい。班長を務める人文研の教員に求められることは、多分野の研究者が「会読」の精神を共有できるテーマを設定することであり、それに参加するに相応しい研究者を探し出す目利きの力なのであろう。大家のご意見拝聴的な研究会は、人文研の共同研究らしくない。

ところが、である。残念なことに、「会読」の現場と時間は、「成果」として「評価」されないのである。「成果」と認定されるのは、著書・論文だけである。若手研究者にとっては、大家の報告を聞くだけでなく、「会読」の精神が共有された討論の現場に居合わすことが、他では経験できない教育の時間になろう。

「会読」は、江戸時代の藩校でも取り入れられていた教育手法であり、その効果が大きなものであったことは、全国の藩校から優れた人材が生み出されていったことからも間違いない。

人文研の共同研究を「評価」してもらうには、学内外の有識者に「会読」の現場に立ち会ってもらうのが一番いいのだが、それは難しい。

いったい共同研究の「成果」とは何かを考えさせられ続けた二年間であった。

岩井会の戦後社会運動史資料

小堀　聡・福家崇洋

二〇二二～二四年度に実施した「近現代日本の研究資源に関する基礎的研究」では、京都大学内外における複数の資料群について、調査と整理を行なってきた。ここでは、なかでも大きな資料群として、大阪市港区の岩井会から人文科学研究所（以下、人文研）にご寄贈いただいた戦後社会運動史資料を紹介したい。

岩井会は、岩井弼次の思想と実践の継承を目的として、一九六九年に結成された団体である。岩井は一八九四年に高槻に生まれ、戦前は無産者診療運動に、戦後は日本共産党の再建や党の地方委員としての活動に

取り組んだ経歴を持つ。一九六九年の岩井没後は、「日本革命運動の歴史的総括と継承」を目指して、戦前・戦後の活動家の聞き取り、資料収集、追悼集の発行などに取り組んできた（以上、岩井会ＨＰによる）。

班長の一人である福家と岩井会との出会いは、二〇一九年にさかのぼる。その頃から福家は京大・西部講堂の歴史を研究しており、その関係で大阪・茨木にある人民新聞社の事務所にお伺いすることがあった。そこでたまたま人民新聞社の方から岩井会の存在を教えていただいたのである。その後、岩井会にご連絡を差し上げたうえで、ＪＲと大阪メトロを乗り継いで、大阪港近くにある事務所をお訪ねして事務局の方々のお話を伺うことができた。ただ、その後はコロナ禍で自粛の嵐が吹き荒れていたため、なかなかお訪ねできないまま、月日だけが過ぎていった。

状況がやや改善してから、福家が小堀らを誘い何度か事務所を再訪して、事務局の方々のお話をお伺いするなかで、貴重な資料群を所蔵されていることを教えていただいた。実際に我々で拝見したところ、大学図書館や公共図書館ではめったにお目にかかれない貴重な戦後社会運動の資料群であることがわかった。そこで、所内の関係者で検討したうえで、ぜひ人文研で資料をお引き受けしたい旨を岩井会にお伝えし、ご快諾いただいた結果、寄贈の手続きに入ることになった（その後、二〇二二年に岩井会より「寄付申込書」をお送りいただき、図書委員会で審議された結果寄贈が承認された）。

人文研にご寄贈いただいた資料について説明すると、①敗戦後の日本共産党関西地方委員会資料（六全協後に関係者が持ち寄った原本を複写した物）、②新左翼諸党派の機関紙類（堀江壮一氏旧蔵）、③一階（元々人民新聞の事務所だった）にあった一九六〇～八〇年代の市民運動の機関紙誌・ビラなどが主な構成になる。分量としては、③が中心で、なかでも一九八〇年代が多い。人文研には、旧日本部教員の渡部徹、松尾尊兊、飛鳥井雅道らが代々集めてきた素晴らしい社会運動史関係の資料群があるが、戦前から敗戦直後の時期に偏っており、一九六〇年代以降の社会運動史資料はかならずしも多くなかった。今回ご寄贈いただいた資料は、人文研所蔵の社会運動史関係資料の時期や分野の穴を埋めるうえで大きな意味を持つ。

これらの資料が人文研本館二階のマイクロ室に運び込まれたのは、二〇二一年一〇月のことであった。段ボールで四一箱におよぶ。本研究班では、②新左翼諸党派の機関紙類と、③市民運動の機関紙誌・ビラを、以下の三段階方式で整理してきた。

まず、第一段階として、新左翼諸党派の機関紙と市民運動の機関紙誌とを分ける。これはそもそも、岩井会でも別置されていて、別々の箱に入っていたため、すぐに終わった。

第二段階では、市民運動の機関紙誌をタイトルの「あかさたな…」ごとに分けつつ、マイクロ室の棚に並べていく。ポイントは、冒頭の「月刊」、「週刊」といった表記は無視することだ。たとえば、『斗争ニュース』は当然「た行」だが、『月刊　斗争ニュース』も「た行」、『週刊　斗争ニュース』も「た行」である。段ボール箱からひたすら機関紙誌を取り出し、空になった箱を順次解体していく。この作業だけで、半年の期間を要した。もっとも、作業時に資料を眺めながら雑談を交わすことで、資料の全体像が班員に共有されていったから、共同研究という意味でも必要不可欠な、充実した時間であったと思う。

そして、第三段階が、いよいよ目録への入力作業である。小堀が「は行」、福家が「ま行」というように、各自が担当を決めつつ、作業を進めた。もっとも入力作業では、研究班員よりもむしろ、リサーチ・アシスタントの皆さんに大活躍をしていただいた。記してお礼を申し上げたい。

入力時に気づいたのが、紙誌名表記の微妙な変転が少なくないということである。参考例を挙げると、『百万遍　第10号』が『百万遍　No. 13』になり、さらには『百万遍 Hyakumanben No. 15』を経て『Hyakumanben 17』に落ち着くといった具合だ。また、表紙と奥付とが異なる冊子も、しばしばみられた。この辺りに、市民運動機関紙誌の、商業誌とは違った手作り感が窺える。

現時点で一〇、四〇七点（うち、新左翼機関紙が六四〇、市民運動機関紙誌が九、七六七）に上る目録をあらためて眺めると、『原子力資料情報室通信』や松下竜一の『草の根通信』といった著名な雑誌もあるとはいえ、大半は、Google に尋ねてもあまりよく分からない刊行物である。一九八〇年代は既に社会運動の停滞期といった指摘はよくなされ、筆者自身もそのように考えていたが、予想以上に有象無象の運動が展開されていたと感じた。

岩井会の資料を通じて、これまでとは違った現代社会運動史の諸相を明らかにできるのではないか。そのためにも、資料公開に向けた作業を引き続き進めていきたい。

名碑拓本のうそほんと

倉本尚徳

人文科学研究所は、国内屈指の約一万点にのぼる拓本資料を所蔵している。そのほとんどは中国の石刻拓本であり、戦前から戦後にかけて収集が続けられてきた。研究所では先人たちの残されたこの貴重な資料を放置せずに研究に活用するため、まず漢代、漢代がおわると三国西晋、その次に北朝といったように、時代順に石刻資料の研究班が組織され、永田英正編『漢代石刻集成』（同朋舎出版、一九九四年）、三国時代の出土文字資料班編『魏晋石刻資料選注』（京都大学人文科学研究所、二〇〇五年）、さらには『東方学報』の第八六～九〇冊に掲載された「北朝石刻資料選注」などの成果が世に送り出されてきた。ただ北朝石刻資料の研究（Ⅱ）班は二〇一五年二月に終了し、その後しばらく中断することとなった。

自身が仏像の銘文などの仏教石刻資料を主な研究対象としていたこともあり、二〇一九年に研究所に職を得て以降、研究所の伝統を絶やさぬよう、研究所所蔵の石刻拓本を資料とした研究班を復活させたいと思っていた。ただ拓本の実物を目の前にしてあれこれ議論するという研究班のスタイルは必ず継承したいと思っていたため、コロナ禍により対面開催が困難な状況下ではなかなか実現しなかった。

しばらくして対面で研究会を行うのに支障がなくなった二〇二三年度から、以前行われていた研究班に参加されていた研究者や関連分野の研究者にお声がけし、「隋唐石刻資料の研究班」を組織した。

当初は対面限定で開催する予定であったが、お声がけした方々からの要望もあり、オンライン併用で研究会を開催することとなった。そうすることで会場参加が難しい遠方の研究者にも参加していただけることとなり、結果的に功を奏したと思っている。特に北朝～隋唐の墓誌に関する膨大な情報をお持ちである南開大学の梶山智史氏にオンラインでご参加いただけたことは、この研究班にとって大変幸いなことであった。梶山氏は最近『新編北朝隋代墓誌所在総合目録』（明治大学東アジア石刻文物研究所・汲古書院、二〇二五年）という墓誌の網羅的な総合目録も出版され、本研究班の活動に多大な貢献をしていただいている。他にもオンラインで積極的に発言下さる方も多く、有り難い限りである。ただ会場で拓本を前にして時には冗談

を交えながらざっくばらんに議論するというのは、オンラインではなかなか難しい。そうした会場の雰囲気をオンラインの方ともいかに共有できるかというのは今後の課題である。

さて、研究班開始にあたって私が最初に訳注の対象としてとりあげたのは、書道界で「隋碑第一」と称されてきた有名な隋の龍蔵寺碑である。この碑は、隋の文帝による仏教復興政策の一環として発布された各州・県に僧尼二寺を建立せよという詔をうけ、恒州の長官が寺院を建立したことを記念して立てられた。碑には州内の一万人がこの事業に参与したと記されている。このように龍蔵寺碑は仏教史の研究にとっても非常に重要な史料であるが、清代の金石学者はおしなべて仏教ではなくその書に注目しており、仏教に対する関心は低い。これらの仏教碑文からいかに地域の仏教史を掘り起こすことができるか、本研究班の課題の一つである。

初年度は、龍蔵寺碑以外に、□静墓誌・南宮令宋君像碑・曹子建碑・南響堂山石窟の王婆羅造像記の会読を行って現代語訳と語注を作成し、その成果を「隋唐石刻資料選訳注（一）」と題して『東方学報』第九九冊に掲載した。「選注」から「選訳注」へと一字を加えたのは、これまでが訓読にとどまったのに対し、今回は現代語訳を行っているからである。その前言で述べたように、いずれの石刻も重要な史料価値を有するが、龍蔵寺碑を除けば書道史における知名度はあまりなく、拓本の扱いに際してもそれほど困ることはなかった。

他方、龍蔵寺碑のような書道で有名な碑には、宋や明代にとられたと称する非常に古い拓本が現存するものもある一方で、原石を模倣した別の石から採拓された翻刻拓本（いわゆるニセモノの拓本）が流通している場合もある。例えば二年目に会読した隋美人董氏墓誌の人文研所蔵拓本は三枚あるが、すべて翻刻拓本である。私は研究班を始める前まで、本物の存在しない偽物の仏像や墓誌などの存在には注意を払っていたが、翻刻拓本の存在には注意しておらず、安易に拓本を信用することの怖さを改めて痛感することとなった。

ただし注意すべきは翻刻拓本だけではない。原石からとられた拓本であっても後代の手が加わる場合もあるのである。龍蔵寺碑の例でいえば、書道の手本として珍重され拓本が多くとられたため、原石の碑が摩耗し、線が細くなったところをもう一度彫り直すという補刻が行われた形跡がある。宋拓や明拓は一般的に現存する原石よりも原形をとどめ文字が多く残っており希少価値が高い。それでは、宋拓や明拓と称されるも

のに全面的に依拠すればよいかというとそう単純ではない。龍蔵寺碑の場合も、最も古いと称される拓本で見えない字が後代の拓本で見える場合が多々あった。その場合、古いとされる拓本が実はそうではないのか、あるいは後代の拓本に後から手が加えられたのか、判断が非常に難しい。

以上のように今回龍蔵寺碑の訳注を担当し、書道で有名な石刻の場合は拓本の取り扱いが特に難しいことを学んだ。これに関連して、本年七月には拓本真偽鑑定の専門家伊藤滋先生を講師としてお招きし、一般の方に石刻拓本の奥深さに触れていただくため「拓本のうそほんと」と題したワークショップを開催する予定である。

また、碑文の文字の釈読を行うにあたり大変お世話になっているのが、インターネット上で本研究所が公開している「京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料」と「拓本文字データベース」である。後者は、文字を検索すればその文字の拓本画像がほぼ時代順に一覧で表示されるという大変便利なものである。ただしこれらデータベースは拓本の標題や文字の釈読などにかなり多くの誤りがあり、修正の必要がある。そこで研究班と並行し、京都大学人文科学研究所人文情報学創新センターの新プロジェクトとして、上記データベースに掲載された研究所蔵拓本の点検と整理、さらにデータベースに収録されなかった石刻拓本の目録作成を行っている。二〇二四年度はこれまで未整理で内容不明であった「唐叢碑」と記された唐代石刻拓本の剪装本全三十二巻、計二百数十点の拓本の内容調査および目録作成を行った。七月のワークショップではこの剪装本も厳選して公開展示する予定である。

古典の現代語訳に付ける語注について——理想と現実のはざま

船山　徹

「『広弘明集』に見る中国中世在家仏教」という三年計画の共同研究班を切り盛りし始めて一年になる。七世紀中頃の漢語仏教書『広弘明集』を採り上げ、その(1)原文を校訂し、(2)現代日本語訳と(3)語注（原典語句の由来と用例を示す語注）を作る作業を、毎回十数人の班員と共に、年に十四、五回行っている。これより先にわたくしは「中国在家の仏教観：唐道宣撰『広弘明集』を読む」研究班（二〇二〇四月～二四年三月）

を組織したので、『広弘明集』を精読する研究班は合わせて丸七年になる。

班長でなく、班員として参加する別の研究班として、倉本尚徳班長「隋唐石刻資料の研究」にも出席し、そこでも別の原典について原文校訂・現代語訳・語注を作る作業の一助を担っている。

こうした「訳注作り」は、東方部では、これまでずっと行ってきた基礎的研究体制である。堅苦しい印象を与え、地道で骨の折れる基礎作業であるが、何かを論ずる前にまず為すべき基盤となっている。

わたくしは一九八八年八月の助手採用以来、かれこれ四十年近く携わる基礎中の基礎である。しかしごく最近、在家者の眼に映る仏教の実態を示す訳注作りに焦点を当てるようになってから、語注を付けることの難しさを強く感じるようになった。そして今は班員と問題意識を共有している（と思う）。

まず、注を付ける目的はそもそも何か、どのような体裁で注を付けるかを述べておきたい。

現代語訳に付ける語注は、辞書的意味を日本語で説明することも稀にはあるが、ほとんどの場合、そうでなく、現代語訳の基づく古典漢語原典の原語に対する情報を漢語原文の羅列で示す。それは、いやみな言い方をすれば、古典漢語を読まない人には意味不明な漢字の羅列である。そのような語注を付ける理由は何かといえば、その「典拠（典故、語の出典）」を主として示し、原典に先行する時代の他の資料と同時代の資料に見られる、「類似の用例」をも提供し、そうした情報で現代語訳の適切さを裏付けること、これが語注の目的である。原文・和訳・語注の例を示そう（梁・僧祐『出三蔵記集』序）。

（原文）道由人弘、於茲験矣。

（和訳）教えは人を通して弘まるのだ、〔そのことが〕ここに明らかである。

（語注）①『論語』衛霊公篇「子曰、人能弘道、非道弘人」。②梁・慧皎『高僧伝』巻三、求那跋摩伝「跋摩曰、夫道在心、不在事。法由己、非由人」（大正五〇・三四一上）。

右の例の場合、①『論語』は、（原文）「道由人弘」が儒教経典『論語』に基づくこと（典拠）と、②『高僧伝』は、類似する用例が同時代の著作に確かに見られること（類似の用例）とを示している。

こうして二方向から語注を示すことで、和訳の適切さを裏付けようとするのが語注の意図である。つまり、語注はその語の①拠り所（みなもと）を明示し、さらに、②語の用例も併記することで、①の古典的語法が著者の時代によく知られ、よく用いられた証しとする。

しかしさまざまな事柄を考慮しながら望ましい形で語注を作ろうとすると、にわかに問題が出てくる。それは何か。現代語訳しようとしている仏教原文作者が果たして本当に古典にくまなく通じていたか、そして、先行する時代や同時代に存在した文献の実際の用例を原文作者が果たして確かに知っていたと言えるのか。

このような「素朴な疑問」がひとたび心に浮かぶと、いったいどのような語注を付けるのが最適かについて、答えを出せなくなってしまうのである。

まず①について、儒学の経典が、仏教においても知識人に必須の学識であるのは疑いないだろう。しかしその対極にある道家の書はどうか。その根本である『老子』『荘子』ならまだしも、それらに基づいて後に編まれた零細な思想書だけに用例を仮に見出したとしても、仏教著者はその語例を知っていたかと考え始めると、想像は膨らむが、確たる答えを出せるかどうかはなはだ心許ない。

とりわけ仏教書の著者が出家僧でなく、在家の居士（例えば貴族や皇室の人）の場合が問題である。周知のように出家者の生活規則を説く『律（ヴィナヤ）』は、僧侶の犯した恥ずべき悪行をあまた取り上げるため、在家者には毒、あるいは、在家者が信心を失う幻滅のきっかけとなるという理由で、在家者に読ませない傾向が高かったと言われている。しかしそのような在家の目に触れにくい『律』にだけ語の出典や語例を見つけられたなら、在家著作の「語注」に含めて示すべきかどうか答えに窮する。すなわち著者が確実に知っていた用例とおそらく決して知らなかったであろう用例との間に、どのような線引きをして注を作るべきか、知らなかった可能性の高い語例を注に入れることの適否を論じ始めたら、一律に全てに当てはまるような回答を示せないのが今の研究の偽らざる現状である。

右に在家仏教信者と出家者に特化した生活規則集『律』の関係を取りあげたが、同じことは煩瑣を極めた経典注釈書の扱い方にも当てはまる。『法華経』や『維摩経』のような著名な経典は在家者にも馴染み深かった。では、それらに対する学僧の詳細な注釈書まで、一般の王侯貴族がくまなく目を通していたかというならかなりの程度で疑わしい。

たかが訳注、されど訳注。将来の発展を見据えたとき、今後どんな研究方針を構築すべきだろうか。

生（せい）の記憶の手ざわりについて

森谷理紗

二〇二五年に入り、ノルウェーでは融解した氷河から古代の遺物が現れ、エジプトではツタンカーメン以来百年ぶりに三六〇〇年前のファラオの王墓が発見された。人類の過去の「生」の痕跡が地球規模で露わになる出来事が起きている一方で、戦後八〇年となる今、かつての戦争体験者に過去の記憶を聞ける時代は閉じられようとしている。それでも今だからこそ沈黙を破り語られる記憶や、口外が禁じられた精神病院の存在と兵士たちのＰＴＳＤの実情、さらには自らが行った加害の告白など、当事者の消失に代わるようにして浮上してきたような戦争の隠れた側面もある。この大きな節目に、歴史研究者を中心に記憶や歴史継承を議論するシンポジウムや学会が相次いで開かれていることは、一つの時代の終焉と、語り手のいない世界線へ突入していくことへの危機感の高まりを反映していると見ることもできる。

生身の人間のコミュニケーションの喪失について言えば、二〇一九年末に発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）で、我々はすでに経験している。リモートワークやオンライン会議、オンラインコンサートにバーチャル展示会といった新たなコミュニケーションのフォーマットが出現した一方で、音楽、演劇などの身体を介在させたライブ体験の共有の価値再考のきっかけとなったことは確かである。

だが、世界中に存在する古代の儀礼音楽や共同体の祭りの踊り、そしてブヌン族に代表される狩猟の前に輪になって歌われるコールアンドレスポンス型の合唱（音程の一致度でその日の心の調和度を測る）、あるいはブルガリア、ジョージア、ロシア、ウクライナ等に見られる微分音の複雑な多声合唱などは、形態は違えどいずれもコミュニティ間の連帯やアイデンティティ形成の重要なツールであり、アフリカのトーキングドラムのような情報伝達、古代中国や古代ギリシアでの精神修練、戦闘時の士気の高揚といったさまざまな機能を持ってきたことを考えれば、現代における文化芸術もコミュニケーションツールとしてのその存在の必然性や人間の「生」との不可分さが自明となってくる。

現代の音楽シーンで興味深いのは、音楽も映像もサブスクに登録すれば物理的なＣＤやＤＶＤを増やさずに楽しむことが可能になった一方で、二〇二四年には

レコードで新曲を発売するアーティストが増えたという現象である。音のふくらみのほか、ジャケットのデザインやレコードの手ざわり、円盤の回る様子を眺める楽しみやコレクションする所有感に反応する若者が少なくない。目視でき、実際に触ることのできるモノの存在と自分との繋がりを確かめ、五感を通して得られる安心感や、身体性への回帰が求められているのである。

また、私が講義をしていた大学の芸術系学生の中では、「人とのつながり」と「コミュニケーション」を自分の創作や表現活動の中で重視しているという声が共通して聞かれた。個性や孤高の芸術ではなく、作品や演技が観衆と共感的に共有され、場に連帯感が生まれる体験に惹かれ、価値が見出されているのだ。これを実現したような例が、昨年大阪で開催された塩田千春の展覧会「つながる私（アイ）」である。パンデミックをきっかけに人々が気付かされた他者とのつながりを「EYE」「私」「愛」という三つの「アイ」から表現したという、美しく、そして生々しいインスタレーションであった。天井から垂直に吊るされた赤い糸、その合間に浮かぶように展示された、世界中の人が白い紙にかいた平和への祈り、そして骨、内臓、血脈の動きを見せる作品群は、生きているからだやその彼岸にある死、他者との精神的なつながりを作家自身が確認し、我々に提示しているようである。

ネットワーク社会の進化により、我々は所属する社会集団を越えて、物理的な身体の移動なしに個々人が世界中の人とつながることができるようになった。戦争中の国の人とも繋がる。私自身、夫がインターネットを通じて知り合い、来日したイスラエルの友人の妹の死を知り、ロシア人の友人や家族が互いに断絶し、亡命していく一部始終を目の当たりにしている。自分の身近な他者の戦争は、遠い異国の誰かではなく自分に関わるものとなる。他者に寄り添い共感する感情は、自分自身の中に生まれる。

過去の出来事の詳細は公文書や戦友会誌等の文字資料の中に見つけることができる。だが、肉体を失った後に、生きた身体を持つ別の他者へと受け渡したかった大事な記憶が、その人がいかに生き、何を感じたかであり、それに反応した他者の中に芽生える共感の心が鎮魂の受け皿となるのだとすれば、その「生」についての記憶の手ざわりを社会の中で共感的に共有してゆくことが、歴史継承につながっていくのではないだろうか。「体験した者にしか分からない」という当事者の言葉の裏にある、言葉だけでは理解されないことへの不安を乗り越える鍵はここにありそうだ。

映画の余韻

――境界管理がもたらす「痛み」

李　英美

ふと『眠りに生きる子供たち』という映画を見た。これはスウェーデンに避難した難民の家族とその子どもたちを追ったドキュメンタリーだ。映画には、避難する前に体験した出来事や、先の見えない不安から逃れるために、昏睡に近い状態に陥る子どもらが登場する。この状態は邦訳では「あきらめ症候群」（Resignation Syndrome）と説明されていた。原因はまだ不明な点が多いが、発症する子どもの滞在地の多くは避難先のスウェーデンだという。

鑑賞後、映画を見る前のタイトルと短いキャプション説明から受けた印象とは大きく異なる印象を受けた。四〇分ほどの短い映像作品だが、その内容は衝撃的だった。極度のトラウマにさらされた子どもたちは突然、昏睡状態に陥るわけではない。それまで活発だった子どもたちが、次第にぼんやりする時間が増え、食事を取らなくなり、最後には何の反応もしなくなる。こうした経過を経て、彼らは完全な無反応状態へと沈んでいくのだ。

邦題は『眠りに生きる子供たち』であるが、原題の『Life Overtakes Me』が示すように、まさに彼らは過酷な現実に心身が追いつかなくなったのだ。国外に逃れるまでの間に目にした出来事や受けたストレスが、子どもたちの心を蝕んでいく。困難な現実に直面した子どもたちは、これから起こりうるリスクや耐えられない現実から身を守るかのように、数ヶ月、数年の間、昏睡状態に陥る。彼らの身体は生きているが、意識は別の場所へと逃避しているかのようだ。

私自身、嫌なことから目を逸らす際に眠りがちになる。原稿の締め切り前などは特に眠り続ける。しかしそれは一時的な逃避に過ぎず、彼らの経験する長期的な無反応状態とは比較にならない。二〇一九年の作品だが、こうした症状は二〇〇〇年代以降に現れはじめたようだ。映画のある場面では、親が昏睡状態の子どもにチューブから栄養を与え、身体を洗う様子が映し出される。筋肉の衰えを防ぐために定期的に身体を起こし動かす。こうして子どもたちは昏睡状態のまま、生きながらえたのだ。

事態は、難民審査の結果が出て滞在許可が降りると、好転の兆しを見せ始めた。徐々に子どもたちは目を覚

まし、回復を遂げた。審査結果を待つ間、住居や適切な医療を受けられている家族の姿からは、スウェーデン社会の支援体制が感じられた。しかし、それでも子どもたちの心の傷を癒すには十分ではなかった。これら一連の出来事は、難民申請者にとって、返事を待ち続け日々のストレスがいかに大きいかを物語っている。

以前、難民審査で当事者の記憶と証言にのみ頼ることには限界があるという論稿を読んだことがある。供述は、その当時の状況のままで提示されることが難しいのだ。トラウマ体験は記憶を断片化させ、一貫した物語として語ることを困難にする。『眠りに生きる子供たち』の子どもたちもまた、自らの体験を言葉で語るのではなく、身体そのもので痛みを表現していたのである。

『ステートレス』は、難民・移民を取り巻く現実を描いたドラマである。オーストラリアの入管収容施設を舞台に、偶然収容されてしまったオーストラリア人女性や、命がけで海を渡ってきた難民家族、そこで働く看守たちの交錯する人間関係を映し出す。

この作品で特に印象的だったのは、収容された被収容者と彼らを管理する看守の変化である。家族を養うために看守として働き始めた男性は、最初は被収容者に同情的であった。だが次第に、周囲の環境に飲まれ厳しい態度へと変わっていく。一人の人間が、機能不全に陥った入管制度という構造に飲み込まれていく過程が鮮明に浮かび上がるのである。

一方、被収容者の多くは二重の苦しみを負っていた。彼らは名前ではなく番号で呼ばれ、人間性を奪われていく。ある難民の家族は、祖国を逃れる際に体験した暴力や危険によるトラウマに加え、収容施設での長期にわたる劣悪な環境により心身が蝕まれていった。

偶然見た二つの作品であったが、これらは異なる角度から難民・移民問題の本質に迫っていたといえる。スウェーデンでは子どもたちが心の避難場所として昏睡状態に入り、オーストラリアでは収容者も看守も制度に飲み込まれていく。これらの作品は、移動を強いられた人びとや国境と対峙せざるを得ない人びとが直面する苦難と、それを受け入れる社会の課題を鮮明に描き出している。こうした問題は、日本社会における出入国管理の現状とも多くの共通点を持っていると感じた。

随筆との距離

劉　冠偉

二〇二四年四月より助教として人文研に赴任して、あっという間に一年が経った。年始に所報への寄稿を依頼され、深く考えずに「書きます」と答えてしまった。その後バックナンバーを参照したら、どうやら自己紹介や自分の研究の紹介ではなく、明らかに「随筆」らしい文章がほとんどだった。知り合いの先生たちはこういったのも書いたことがあるのだなと、興味津々で数巻のバックナンバーを読み続けた。そして、私への依頼もこのような随筆が求められていることに気づいた。「やーまいったな、論文じゃないのか」と少し困惑した。随筆は小学生のころから好きだし、学部時代までたまにＳＮＳで適当に書いていた。もちろんどちらも中国語のものだった。今度は日本語で書くのかと思いながら、Twitterや技術系ブログ以外、私は日本語で論文しか書いたことがないことに気づいた。

なぜ書いていなかったのだろう。実は博士課程修了して就職してからこの数年間、論文、ニュース、技術系ブログ、物の取扱説明書以外、日本語で書かれたものをあまり読まなくなった。自分がつまらない人間になっているなと痛感した。確かに仕事や育児に忙しいが、実際には毎日ある程度の休憩時間があるはずなのに、なぜ読まないのだろう。自分の休暇時間を振り返れば原因がわかるはずだ。

考えてみれば、休暇時間の多くはスマホをいじって過ごしていた。ＳＮＳや動画サイトでは確かに英語か日本語のコンテンツばかりを閲覧していたが、中国語の小説アプリをダウンロードして、過去の自分が「くだらない小説」だと思っていた軽いネット小説にいつの間にかはまるようになった。昼休みまたは寝る前に、何も考えずに消費できるコンテンツに逃げ込んでいたのだ。

日本語の文学作品や随筆を読まなくなった理由を考えると、おそらく「気軽さ」を求めていたからだろう。中国語は母語なので、読むときの脳への負荷が少ない。対して日本語は、どんなに流暢に話せるようになっても、やはり外国語としての壁がある。特に文学的な表現や古典的な言い回しが出てくると、辞書を引きながら読むことになり、リラックスして楽しむという感覚からは遠くなる。

しかし、これは単なる言い訳かもしれない。研究者

として日本で生活し、日本語で教え、日本語で論文を書いているのに、日本語の文学や随筆から遠ざかっているというのは、何か大切なものを見失っているような気がする。日本語の論文は書けても、日本語の「感性」や「情緒」を理解していなければ、本当の意味で日本の学術コミュニティに溶け込むことはできないだろう。

ふと研究室を見回すと、本棚には専門書ばかりが並んでいる。学術書と参考資料。それらは研究には欠かせないものだ。修士のころに買った数冊の漫画はあるが、博士課程の時は「忙しくて読む暇がない」と言い訳していた。今はどうだろう。

所報への随筆。それは私にとって、ただの義務ではなく、日本語で「考える」訓練の機会なのかもしれない。論文の厳密さとは違う、言葉の持つ柔らかさや曖昧さを楽しむ時間だ。言葉を通じて自分の思考を形にし、それを他者と共有する。それこそが研究者としての本質的な仕事なのではないだろうか。

しかし、明日になっても、私はきっと日本語の随筆集を買いに行くことはないだろう。日常の慣性は強く、結局いつものようにスマホで中国語のネット小説を読み続けるに違いない。図書館へ行って文学作品を探す計画も、忙しさを理由に先送りにするだろう。随筆に触れるための準備をするよりも、専門分野の最新論文をチェックする方が、研究者としての自分には「正しい」選択のように思えてしまう。

人文研での研究生活と随筆を書くことは、確かに「言葉との対話」だ。しかし、その対話の形は人それぞれなのだろう。私にとっては、論文という形式こそが最も自然な表現方法なのかもしれない。随筆と論文の間にある壁は、単なる言語の問題ではなく、思考のパターンや表現の好みによるものだろう。

所報の締め切りまではまだ数日間ある。この間に、無理に日本語の随筆に親しもうとするより、自分らしい表現方法を模索してみよう。論文的な厳密さと随筆的な自由さの間で、私なりの言葉の使い方を見つけられるかもしれない。それが研究者としての自分の個性になるのではないだろうか。言葉との付き合い方に「正解」はないのだ。それを受け入れることから始めてみよう。そして気づけば、私は随筆を書いていた。

うん、やはり書いてしまった。

浅井佑太

20世紀「新音楽」における作曲コンセプトと創作プロセスの関係―バルトーク《ミクロコスモス》第141番〈イメージと反映〉とウェーベルン《弦楽四重奏》作品28の比較を通して　お茶の水音楽論集　二四巻　四月

戦いの軌跡としての音楽―シェーンベルクという《神》に抗うこと　月刊オーケストラ（読売日本交響楽団）　六月号

紹介　イーサン・ハイモ、ザビーン・ファイスト編、佐野旭司訳『シェーンベルク書簡集―世紀末ウィーンの一断面一八九一年～一九〇七年五月』　音楽学　七〇巻一号　一〇月

叫び続けた作曲家―シェーンベルクにとっての芸術家の条件　Salon（ザ・フェニックスホール）　一五三巻一一月号

解説　シェーンベルク　地上の平和　音楽之友社　一二月

池田巧

ムニャ語の口蓋垂音について：東西両語における同源語の語形の比較から（共著）　松江崇・池田巧編『シナ＝チベット系諸言語の文法現象7　音声と語彙の記述分析』　十二月

西暦1882年に報告されたリュズ語の語彙　松江崇・池田巧編『シナ＝チベット系諸言語の文法現象7　音声と語彙の記述分析』　十二月

Aspects of the Acquisition of the Tibetan Language (Literary and Colloquial) by Japanese Researchers from the Late Nineteenth to Early Twenty-First Century. *Chiers d'Extrême-Asie*. 33.　十二月

石井美保

山の声、人のしるし　辻まこと『あてのない絵はがき』　現代思想　五月

書評　『コロナ禍と出会い直す』磯野真穂著　日本経済新聞　七月

◉裏庭のまぼろし―家族と戦争をめぐる旅　亜紀書房　七月

茶碗と骨　群像　八月

もったいない語辞典　ご不浄　敬うべきケガレの力　読売新聞　九月

Light and wind and hands enchanting the world In *Personal Reality Show*, Atsuko Ishii　十月

「生き残る」ということをめぐる、問いについて　群像　十二月

島々の祈り　ユリイカ　十二月

書評『わたしの人生』ダーチャ・マライーニ著　日本経済新聞　一月
石畳の小径　みんなのミシマガジン　一月
驚きを待ち受ける―人間―野生の関係と人獣共通感染症　藤原辰史・香西豊子編『疫病と人文学―あらがい、書きとめ、待ちうける』　岩波書店　二月
憑依から落語をみる―かたり、ふり、座　森本淳生・鈴木亘編『落語と学問する』　水声社　三月
豚の息（1）　みんなのミシマガジン　三月

石川禎浩

◉中国共産党、その百年：陳独秀から習近平までの超巨大執権党の行程とその属性（韓国語　姜抄亜訳）　ソウル TOBE ブックス　四月
ある研究班員の執念　人文　七一号　六月
◉20世紀中国史の資料的復元　京都大学人文科学研究所　七月
「若干の歴史問題に関する決議」の資料的復元に向けて：毛沢東の講話「ボリシェヴィキ化12カ条について」解析　石川禎浩編『20世紀中国史の資料的復元』　七月
Living as a Cog in the Party Organization: A Revolutionary Way of Life in 1940s China, Joan Judge et al. (eds.), *The Sinosphere and Beyond: Essays in Honor of Joshua Fogel*, DeGruyter,　七月
毛沢東―革命のカリスマと詩の力　中国―社会と文化　三九号　七月
「四大文明」学説的形成与伝播：跨越世紀的対話　中山大学学報　三一〇期　七月
梁啓超、孫文、そして神戸―梁啓超生誕一五〇周年記念学術シンポジウムに寄せて　孫文研究　七四号　七月
書評 J. DOYON and C. FROISSART (eds.), The Chinese Communist Party: A 100-Year Trajectory. *Pacific Affairs*.　一二月
孫文　死して一〇〇年―遺言状の行方から考える　中国学 COM　三月一二日
遠ざかる庄内　季刊 Cradle　春号　三月

稲葉穣

アフガニスタンの地理と歴史　ORIENTE　三月

稲本泰生

編集後記（短評）　仏教芸術　十三号　九月
特別講座報告　五台山仏教文化の形成／伝播と造像　仏教芸術　十四号　三月

岩城卓二

ある僧侶の人生―人事記録としての本興寺文書―　苅谷定彦小西日遶　大平宏龍　三先生頌寿記念論文集『法華仏教の潮流』　法蔵館　九月
◉本興寺文書　七（共編著）　清文堂出版　十月

WITTERN, Christian

道元を翻訳する　思想　一二〇五号　九月

デジタル漢籍の誕生―紙から画面へ　リュッターマン・マルクス編『「かのように」の古文書世界』　彩流社　十二月

岡澤康浩

可能性の空間の地図制作―概念の歴史学と実践の社会学の対話―　人文学報　一二二号　六月

菊地暁

民間伝承の会「支部」をめぐって　北見継仁編著『知られざる佐渡の郷土史家・蒐集家：青柳秀雄の生涯とその業績』　皓星社　四月

対談：回遊する知としての民俗学（共著）　現代思想　五二巻六号　五月

京都・左京区研究　11　京都に残る〝下宿屋〟学生とともに一〇〇年　八三歳主人明かす秘話　The KYOTO　六月二八日

『ライフヒストリーレポート選』のこれまでとこれから―校正担当者座談会―（共著）　人文学報　一二二号　六月

◉記念誌　小池淳一先生還暦記念　日本民俗学講習会（編著）　同会世話人　七月

◉書いてみた生活史：学生とつくる民俗学（編著）　実生社　十月

◉記念誌　政岡伸洋先生還暦記念　日本民俗学講習会（編著）　同会世話人　十一月

フォーラム　日本民俗学会国際シンポジウム「スマホ時代の歩き方：東アジアとの対話」（共著）　日本民俗学　三二〇号　十一月

◉ライフヒストリーレポート選二〇二四（編著）　京都大学民俗学研究会　十二月

要旨：赤松智城の近代仏教と宗教人類学　宗教研究　九八巻別冊　三月

金智慧

오카모토 기도「미노와노 신주」론：신가부키의 장르적 특성과 2 대 이치카와 사단지와의 관계에 주목하여（岡本綺堂「箕輪の心中」論：新歌舞伎のジャンル性と二代目市川左団次との関係を手掛かりとして）　日語日文学研究　二月

書評［Book Review］Jihye KIM: Daniel Gallimore, *The Japanese Shakespeare: Language and Context in the Translations of Tsubouchi Shōyō*（Routledge, 2024）. *English Journal of JSTR* 4. Japan Society for Theatre Research.　三月

倉本尚徳

道宣与玄奘―従西明寺僧職的選任談起―　魏晋南北朝史研究　一輯　七月

隋唐石刻資料選訳注（一）（編・共著）

東方学報　京都九九冊　十二月
道宣『浄心誡観法』成立年代再考―その仏性説に関連して―
印度学仏教学研究　七二巻二号　三月

呉　孟晋

欣賞中国現代主義絵画的日本人―閲読中華独立美術協会的日文展評―　中国芸術研究院美術研究所編『中国近現代美術留学史料与研究研討会論文集』　広西師範大学出版社　四月
（動向）美術　『中国年鑑二〇二四』　中国研究所　五月
昭和二年の溥儒の来日について　石川禎浩編『二〇世紀中国史の資料的復元』
京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター　七月
近代漢学者の墨戯―長尾雨山が描いた絵画をめぐって―　朱琳・渡辺健哉編著『近代日本の中国学―その光と影―』（アジア遊学二九九号）　勉誠社　十一月
「国画」の名のもとに―民国期広東の国画研究会における中国画の伝統と革新―（特集：日本画のトポグラフィー）
美術フォーラム二一　五〇号　十二月
中国の「新興絵画」と社会、そして戦争―『美術雑誌』にみる何鉄華のモダニズム芸術理論について―　高階絵里加・竹内幸絵編『芸術と社会―近代における創造活動の諸相―』　森話社　一月
戦後台湾の抽象絵画をめぐる「制度」的言説―『聯合報』にみる五月画会と東方画会の展覧会について―　村上衛・田口宏二朗・木越義則編『近現代中国の制度とモデル』
京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター　一月
東アジアの近代を美術でたどるには
コメット通信　五四号　一月
聖アントニウスの誘惑　京大広報　七七八号　一月

古勝隆一

項目執筆　『論語』・孔子・訓詁学・石経・『五経正義』　川合康三・大谷雅夫・黒田真美子・小島毅・後藤昭雄編『中国日本〈漢〉文化大事典』　六月
解説　清水茂著『中国目録学』　筑摩書房　十二月

小関隆

「許容する社会」、モラルの再興、マーガレット・サッチャー
長谷川貴彦編『サッチャリズム前夜の〈民衆的個人主義〉：福祉国家と新自由主義のはざまで』　岩波書店　三月

小堀聡

自由民権150年―問われる現代政党　毎日新聞　四月二五日
電源3法50年―「原発」根本からの検証を　毎日新聞　五月二三日
青空がほしい再訪―高度成長期戸畑の婦人会による反公害運動の道のり　人文学報　一二二号　六月
出生率低下対策―都知事選で論争を　毎日新聞　六月二七日
公害と環境史　鈴木淳・山口輝臣・沼尻晃伸編『日本史の現

在6　近現代2』　山川出版社　七月
電力・ガス・水道　大阪社会運動協会編『大阪社会労働運動史　第一〇巻』　大阪社会運動協会　七月
国際秩序不透明―安保論、長期・複眼的に　毎日新聞　七月二五日
五輪と甲子園―選手本位の暑さ対策必要　毎日新聞　八月二二日
自民総裁選後―衆院解散の「大義」とは　毎日新聞　九月二六日
新幹線開業60年―受益の裏にあった受苦　毎日新聞　十月二四日
編集後記　社会経済史学　九〇巻三号　十一月
日本の戦争支えた経済政策―人々の生活を犠牲に　毎日新聞　十一月二八日
Book Review Takayanagi, Tomohiko. 2023. Onsen-ryokō no kin-gendai [The modern history of hot spring trip]. Tokyo: Yoshikawa Kōbunkan. *Japanese Research in Business History* (41).
企業・団体献金―石破首相の試金石　毎日新聞　十二月二六日
教員不足―平成の改革、再検証せよ　毎日新聞　一月二三日
日本資本主義のなかの流行性感冒　藤原辰史・香西豊子編『疫病と人文学―あらがい、書きとめ、待ちうける』　岩波書店　二月
書評　中瀬哲史著『日本の電力システムの歴史的分析―脱原発・脱炭素社会を見据えて』　企業家研究　二五号　二月
治安維持法100年―国家の暴走防ぐために　毎日新聞　二月二七日
日本社会の偏り―是正が全体の利益に　毎日新聞　三月二七日

酒井朋子

手の不穏な物神性―あいまいで多義的な手洗いについて　藤原辰史・香西豊子編『疫病と人文学―あらがい、書きとめ、待ちうける』　岩波書店　二月
自分が生み出す「抜けた体毛、排泄物、垢、体臭…」を記し続けてわかったこと　WEBアスティオン　五月

菅原百合絵

閉じ込められる女たち：修道院・ハーレム・鳥籠　仏語仏文学研究　五八号　十一月
大洪水の前に　人文　七一号　六月
素顔の淋しさ　短歌（角川）二〇二四年八月号（特集：没後七十年　これからの中城ふみ子）　読売新聞　六月十一日
異邦と日本語（短歌あれこれ）　読売新聞　六月十八日
織物としての歌（短歌あれこれ）　読売新聞　六月二五日
先人の仕事（短歌あれこれ）　読売新聞　七月二日
歴史と過去（短歌あれこれ）　京都新聞　十月七日
水辺をめぐる断章（季節のエッセー）

思いに足りない言葉（季節のエッセー）　京都新聞　十一月十二日
本棚での逢引（季節のエッセー）　京都新聞　十二月十六日
農民の踊りを夢見る（季節のエッセー）　京都新聞　二月十日
清少納言の目（季節のエッセー）　京都新聞　三月十七日
短歌俳句競詠「題　走る」（五首連作）　読売新聞（夕刊）　四月十二日
声の雨（連作五首）　短歌研究　五・六月合併号
海を見る顔（連作十五首）『現代短歌パスポート　おかえりはタックル号』　書肆侃侃房　五月
驟雨（連作十首）　現代短歌　二〇二四年七月号
夏の講義室（連作十二首）　うた新聞　二〇二四年八月号
緑色の国（連作十首）　俳句四季　二〇二四年十一月号
砂色（連作七首）＋プルーストの仕事部屋（エッセイ）　短歌（角川）　二〇二五年一月号
書評　翳らふ部屋　大辻隆弘『橡と石垣』　現代短歌　二〇二四年十一月号

須永哲思

私立各種学校・京都人文学園の歴史―「人文主義の精神に依る教育」のゆくえ―　人文学報　一二二号　六月
〈資料目録Ⅰ〉京都勤労者学園所蔵京都人文学園関係資料目録（共著）　人文学報　一二二号　六月
〈資料目録Ⅱ〉吉田九洲穂旧蔵京都人文学園関係資料目録　人文学報　一二二号　六月
〈翻刻資料Ⅱ〉講義ノート「一般教養（新村猛先生）（6.10趣意書ニ依ル）」　人文学報　一二二号　六月
〈翻刻資料Ⅲ〉簿冊「昭和二十一年度　審査合格者作文京都人文学園」　人文学報　一二二号　六月
書評　新井浩子『社会教育における生活記録の系譜』を読んで　日本教育史研究　四三号　八月
尼崎市教職員組合文書―兵庫県教職員組合尼崎市支部・園田中学校分会旧蔵簿冊資料にみる、一九四八年「五・二一ストト」―　地域史研究　尼崎市立歴史博物館　一二四号　一月
La Infanoj de la Mondo kaj ties redakta procezo. *Internacia Pedagogia Revuo* 55, Internacia Ligo de Esperantistaj Instruistoj.　一月

瀬戸口明久

レールに身体を横たえて―鉄道自殺の技術論　人文学報　一二二号　六月
「軍事空間」としてのパンデミック―COVID-19とマラリア　藤原辰史・香西豊子編『疫病と人文学―あらがい、書きとめ、待ちうける』　岩波書店　二月
コメントⅠ　農業史研究　五九号　三月

髙井たかね

虎渓山漢簡「食方」　読書会　人文　七一号　六月

監修　坐様式の変遷・明清家具　建築知識　七月
建築アーカイブの現在⑧京都大学研究資源アーカイブ（共著）　建築雑誌　一七九一号　八月

高木博志

寿岳文章と向日庵本の時代　並木誠士編『近代京都の美術工芸Ⅱ―学理・応用・経営』　思文閣出版　七月
研究の現在地 VOL. 10　歴史から近代天皇制の合理性を問う（編集・砂川史佳）　京都大学新聞　十月十六日
大阪歴史学会近代史部会（『近代史研究』）と服部先生『服部敬　人と学問』　同刊行会　十月
近代天皇制の虚構性を問う―京都主基抜穂の儀違憲訴訟から考える　燎原　二六七号　二月
大正期の文化・学術と茨木キリシタン遺物の発見　マルタン・ノゲラ・ラモス、平岡隆二編『関西の隠れキリシタン発見』　人文書院　二月
明治十年、二十年、二十三年の京都行啓と美子皇后「史料紹介・女学校関係記録　一」　池坊文化研究　七号　三月
西川祐子先生と長夫先生の学恩（京都文教大学）総合社会学部研究紀要　二六集　三月

◉生駒市史史料集第四集　近世・近代史料四　史料に見る生駒の近現代―村から町、そして市へ（共著）　生駒市　三月

高階絵里加

「社交」の美神　人文　七一号　六月

◉芸術と社会　近代における創造活動の諸相（共編著）　森話社　一月

立木康介

書評　北山修著『新版　心の消化と排出―文字通りの体験が比喩になる過程』　精神分析研究　六八巻二号　四月
思考の没落、抑圧の消滅―アメンチア無意識の時代　精神分析的精神医学　一四号　五月
「「盗まれた手紙」についてのセミネール」のためのノート　ジャック・ラカン研究　二三号　九月
ヴァニエ氏講演へのコメント　ジャック・ラカン研究　二三号　九月
編集後記　ジャック・ラカン研究　二三号　九月
精神分析における「現実」―フロイト、ウィニコット、ラカン　塚本昌則・鈴木雅雄（編）『〈現実〉論序説　フィクションとは何か？　イメージとは何か？』　水声社　十二月

直野章子

祈りと対話の場を―役割問われる被爆地　共同通信配信（山陰中央新報、日本海新聞、南日本新聞、琉球新報ほか）八月二一日ほか
罰を受ける母親たち―コロナ禍が映し出すジェンダー不平等とケアの危機　藤原辰史・香西豊子編『疫病と人文学―あらがい、書きとめ、待ちうける』　岩波書店　二月

一个表示 ‘圆’ 的词族　汉语史学报　31号　三月
安徽大學藏戰國竹簡『仲尼曰』譯注（2）
雲漢　3号　三月

平　岡　隆　二

◉山田慶兒著作集　第七巻—科学論（近代篇）・欧文（編集）
臨川書店　七月
解題　『山田慶兒著作集　第七巻—科学論（近代篇）・欧文』
臨川書店　七月
◉関西の隠れキリシタン発見—茨木山間部の信仰と遺物を追って（共編）
人文書院　三月
茨木へのキリスト教伝来—その由来と展開　マルタン・ノゲラ・ラモス、平岡隆二編『関西の隠れキリシタン発見—茨木山間部の信仰と遺物を追って』
人文書院　三月

福　家　崇　洋

提言　思想史の森で彷徨うために『思想史講義』の試みから
日本思想史学　五六号　六月
はじめに
人文学報　一二二号　六月
戦後歴史学の明暗　渡部徹と社会・労働運動史研究
人文学報　一二二号　六月
宮崎家所蔵宮崎龍介関係資料目録
人文学報　一二二号　六月
〈資料目録Ⅰ〉京都勤労者学園京都人文学園関係資料目録（共著）
人文学報　一二二号　六月

永　田　知　之

「国風」民間起源説の波紋—南宋末期から清代中期までの文学論を材料として　川合康三先生喜寿記念論集刊行会編『〈中国の詩学〉を超えて』
研文出版　十月
【解説】面白さのエッセンスを浮き彫りに　井波律子『中国ミステリー探訪　千年の事件簿から』　潮出版社　十一月

中　西　竜　也

A flexible choice of comrades: the dynamic identity of the Muslim Huis of the seventeenth and eighteenth centuries. *International Journal of Asian Studies.* First View（online）
四月

野　原　将　揮

数词〝一〟到〝十〟的上古音
中国语言历史地理研究　十一月
《汉藏语历史语言地图集》—〝三〟的汉语部分
中国语言历史地理研究　十一月
《汉藏语历史语言地图集》—〝四〟的汉语部分
中国语言历史地理研究　十一月
《汉藏语历史语言地图集》—〝九〟的汉语部分
中国语言历史地理研究　十一月
上古前元音假说与闽语中〝面〟和〝眠〟的读音
辞书研究　25-1号　一月
◉闽语与上古音（共著）
中西书局　三月

〈資料目録Ⅲ〉新村猛関係資料目録（共著）　人文学報　一二二号　六月
〈資料目録Ⅳ〉京都地方労働組合総評議会（京都総評）関係資料目録　人文学報　一二二号　六月
〈翻刻資料Ⅴ〉新村猛「佐々木時雄弔辞」　人文学報　一二二号　六月
南砺紀行　人文　七一号　六月
日本における共産主義運動　鈴木淳・山口輝臣・沼尻晃伸編『日本史の現在六　近現代二』　山川出版社　七月
「中間派」無産政党と機関紙発行事業　中間派無産政党機関紙集『日本労農新聞』『日本大衆新聞』『全国大衆新聞』『全国労農大衆新聞』別冊　琥珀書房　十一月
四　大衆社会からアジア太平洋戦争へ　『生駒市史史料集第四集　近世・近代史料四　史料に見る生駒の近現代～村から町へ、そして市へ～』　生駒市役所　三月
生駒市史史料集第四集　近世・近代史料四　史料に見る生駒の近現代～村から町へ、そして市へ～（共監修）　生駒市役所　三月
河上肇と無産政治運動　河上肇記念会会報　三月

藤　井　律　之

隋唐石刻資料選譯注（一）（共著）　東方学報　京都九九冊　十二月

藤　野　志　織

関西日仏学館（京都）に関する資料―戦前の文化活動を中心に　人文学報　一二二号　六月
新村猛と『世界文化』―1930年代京都のフランス的文脈を踏まえて　人文学報　一二二号　六月
京都におけるフランス文化受容の一側面―関西日仏学館の美術部・音楽部を例として　高階絵里加・竹内幸絵編『芸術と社会―近代における創造活動の諸相』　森話社　一月

藤　原　辰　史

入門　食と農の人文学（共編）　ミネルヴァ書房　四月
地球にかぶりつく―絵本『食べる』について　月刊書評誌　子どもの本棚　五三巻四号　四月
羅針盤　消えたいと思う子たちへ　山陰中央新報　四月十四日
民の庭　片岡俊著『Life Works』　四月
労働から考える「食と権力」　藤原辰史ほか編『入門　食と農の人文学』　世界　九八一号　五月
田舎党宣言　共同通信配信　五月
地に落ちた人間の尊厳　愛農　二〇二四年五・六月号　八八一号　五月
美学的課題としての食と農～歴史から学ぶ～（後編）
書評　山本義隆『核燃料サイクルという迷宮』　東京新聞　六月二十二日
羅針盤　後世に残すべき林業の価値

山陰中央新報　六月二十三日
座談会　藤原辰史×阿古真理「歴史学者から見たキッチンの昔と今」阿古真理著『日本の台所とキッチン100年物語』
平凡社　六月
독일 현대사 연구의 돌이킬 수 없는 실루-팔레스타인 문제를 경시한 배경（ドイツ現代史研究の取り返しのつかない過ち）
역사와책임　제14호　一四号

◉中学生から知りたいパレスチナのこと（共著）
ミシマ社　七月
給食世直し論
教育　九四二号　七月
チンプンカンプン大学育学部ゼミ二〇二四年夏期講座編　抵抗の拠点としての発酵
クーヨン　二九巻八号　七月
給食のエコロジカル・ターン
調査月報2024年7月　一九〇号　七月
世界の難問に立ち向かう主役は農業
農業協同組合新聞　七月十日
関心領域の限界破ろう
北海道新聞　七月十九日
24年上半期読書アンケート
図書新聞　七月二十七日
資本の横暴と対極の協同
農業協同組合新聞　七月三十日
学食改革素案
大学出版　一三九号　八月
ひもとく　犠牲が支える歴史
朝日新聞　八月十日
ひもとく　癒えない傷直視し広い視野を
朝日新聞　八月十日
人を人として見ること
中日新聞　八月十二日
協同組合の原点としてのパン焼きかまど　Forbes Special Edition
農林中央金庫　八月
長崎平和祈念式典から考える（上）
共同通信配信　八月
農業経済学のポテンシャル―歴史から考える―
農業経済研究　九六巻二号　九月
給食と子どもたちの存在
クレスコ　二八二号　九月
羅針盤　ジェンダー先入観突破を　山陰中央新報　九月八日
座談会　歴史から農業経済学を照射し未来を展望する
農業経済研究　九六巻二号　九月
犠牲者をつくり出さない地球社会へ
KyotoU Future Commons　十月
座談会　京都大学でいま、何が起こっているのか　駒込武著『統治される大学　知の囲い込みと民主主義の解体』
地平社　十月
原爆すら想起　生存条件を根こそぎ破壊
朝日新聞　十月七日
民と文字文化
ちゃぶ台13　一三号　十月
歴史の肌理に向き合う
月刊アートコレクターズ　一七巻一一号　十月
座談会　藤原辰史×芥川仁「水俣に教えられたこと　写真家と歴史家の対話」　水俣・写真家の眼通信　二号　十一月
木次線　地方鉄道再生の先頭に
山陰中央新報　十一月二十四日
食と抵抗―日本現代史紀行【第一回】はじめに―食権力の現場を歩く
熱風（GHIBLI）　二二巻一一号　十一月

◉青い星、此処で僕らは何をしようか（共著）

ミシマ社　十二月

◉わたしからはじまるわたしたちを育む働き方（共著）
コトノネ　十二月

書評　コモナーズ・キッチン（小笠原博毅・ミシマショウジ・栢木清吾）『舌の上の階級闘争「イギリス」を料理する』　週刊読書人　十二月六日

食と抵抗―日本現代史紀行【第二回】権力と農民―大潟村の有機農業［前編］　熱風（GHIBLI）　二二巻一二号　十二月

コロナ・パンデミックによる政治と社会の重症化　田間泰子ほか編『〈家族〉のかたちを考える②家族と病い』
法律文化社　十二月

24年下半期読書アンケート　図書新聞　十二月二十一日

書評　井田千秋『ごはんがたのしみ』
朝日新聞　十二月二十八日

書評　「世界大戦前夜」に関して考えるためのおすすめの本
文藝界　七九巻一号　一月

変革への最後の機会を逃すな　農業共済新聞　一月一日

食と農業から見る現代社会の課題
大阪保険医新聞　一月五日

書評　ピエール・ジュヴァンタン『ダーウィンの隠された素顔』　図書新聞　一月十八日

企業の理念　見極めたい　北海道新聞　一月二十四日

◉疫病の人文学　あらがい、書きとめ、待ちうける（共編）
岩波書店　二月

座談会　いま「この星」のどこかで―『この星のソウル』をめぐって
新潮　一二二巻三号　二月

羅針盤　風景は歴史の地層　山陰中央新報　二月九日

食と抵抗―日本現代史紀行【第三回】権力と農民―大潟村の有機農業［後編］　熱風（GHIBLI）　二三巻二号　二月

薬と食　あしたの畑2024　二月

暗中模索の人文学―つぎの疫病に向けて　藤原辰史ほか編『疫病と人文学　あらがい、書きとめ、待ちうける』
岩波書店　二月

他炊論　ユリイカ　五七巻四号　二月

インタビュー　食をひもとく歴史学者に聞く「縁食」で緩やかにつながる社会の在り方　EKISUMER
駅消費研究センター　六三号　三月

縁食とは何か―「関係の健康」について　のんびる
パルシステム生活協同組合連合会　一八九号　三月

分解の哲学「捨てられたもの」をめぐる思考
箱庭療法学研究（別冊）　三七巻一号　三月

ほどく、たかる、すまう―自己攻撃時代の生の哲学　内藤直樹ほか編『寄食という生き方　埒外の政治―経済の人類学』
昭和堂　三月

子供の貧困　給食が安全網に　朝日新聞　三月十二日

落語のなかのボロとクズ――捨てられたものの再生　森本淳生・鈴木亘編『落語と学問する』
水声社　三月

船山　徹

インド哲学から再読する『意識と本質』（井筒俊彦）

人文　七一号　六月

格義　川合康三・大谷雅夫・黒田真美子・小島毅・後藤昭雄共編『中国／日本〈漢〉文化大事典』　明治書院　六月

漢訳仏典　川合康三・大谷雅夫・黒田真美子・小島毅・後藤昭雄共編『中国／日本〈漢〉文化大事典』　明治書院　六月

慧遠　川合康三・大谷雅夫・黒田真美子・小島毅・後藤昭雄共編『中国／日本〈漢〉文化大事典』　明治書院　六月

中国初の漢訳律『僧祇戒心』の嘘とまこと　岸野亮示編『戒律研究へのいざない』　臨川書店　九月

Yijing's Incomplete Translation *Verses of the Examination of the Universal* (*Guan zongxiang lun song* 觀總相論頌) Charles DiSimone & Nichlas Witkowski (eds.), *Buddhakṣetrapariśodhana: A Festschrift for Paul Harrison*, Indica et Tibetica 63, Marburg　十月

漢訳できない語をどうするか：唐の玄奘に託された「五不翻」説の再検討　東方学報　京都九九冊　十二月

前近代中国の仏典漢訳：翻訳方法と翻訳不可能性の具体的事例　京都・宗教論叢　一八号　三月

古　松　崇　志

◉3か月でマスターする世界史―モンゴルが変えた世界（共編）　NHK出版　五月

契丹（遼）皇帝の儀礼空間―受冊礼・柴冊礼を例として―城倉正祥編『生と死の儀礼空間―日中の都城・陵墓・寺院の発掘事例から―』　早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所　三月

宮　紀　子

モンゴル時代史鶏肋抄（三四）アラクカン家から眺める帝室の攻防（下）　究　一五七　ミネルヴァ書房　四月

モンゴル時代史鶏肋抄（三五）カアンの権力の衰退　究　一五八　五月

◉3か月でマスターする世界史―モンゴルが変えた世界（共編著）　NHK出版社　五月

モンゴル時代史鶏肋抄（三六）災厄の根源へ　究　一五九　六月

◉クビライ・カアンの驚異の帝国―モンゴル時代史鶏肋抄　ミネルヴァ書房　三月

宮　宅　潔

岳麓書院所蔵簡〔伍〕138～145簡試釈―解爵・疇吏・鼎　『武漢大学第五回海外学術週国際シンポジウム「新出土秦漢簡牘国際学術研討会」予稿集』　八月

秦代県尉小考　その職掌よりみた占領統治の実態　東方学報　京都九九冊　十二月

岳麓書院所蔵簡《秦律令（貳）》訳注稿　その（二）（共訳）　東方学報　京都九九冊　十二月

京都大学人文科学研究所附属現代中国センター　一月

向井佑介

東アジア世界からの視点　考古学研究会編『考古学研究会七〇周年記念誌　考古学の輪郭』　四月

中国における唐代以前の瓦窯構造　窯跡研究会編『瓦窯の構造研究』　真陽社　五月

◉翻訳　王其鈞『中国庭園図解辞典』　科学出版社東京・ゆまに書房　八月

厚葬から薄葬へ—曹操とその一族の墓を掘る　京都大学人文科学研究所附属人文情報学創新センター編『清と濁の間—銘文と考古資料が語る曹操とその一族』　朋友書店　二月

中国中世の喪葬と仏教についての一考察—隋張盛墓の儀礼と信仰空間　笹栗拓・菱田哲郎編『京都府立大学考古学論集—考古学研究室三〇周年記念』　京都府立大学文学部歴史学科　三月

◉東アジア災害人文学への招待—気候変動・災害多発時代に向き合う人文学（共編著）　臨川書店　三月

中国災害考古学事始　山泰幸・向井佑介編『東アジア災害人文学への招待—気候変動・災害多発時代に向き合う人文学』　臨川書店　三月

村上　衛

一八世紀中国経済の数量的復元—「大分岐」と大豆・砂糖　石川禎浩編『二〇世紀中国史の資料的復元』　京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター　七月

◉近現代中国の制度とモデル（共編）

森本淳生

翻訳　ルネ・ギル『最良の生成』（René Ghil, *Le Meilleur devenir*, 1889）—翻訳と註解の試み—（共同監修）　人文学報　一二二号　六月

書評　ジャン＝ニコラ・イルーズ『マラルメ　諸芸術のあわい』　日本ヴァレリー研究会ブログ「Le vent se lève」（https://www.paul-valery-japon.com/blog）　一月

翻訳　ギュスターヴ・カーン「主題と変奏」（『放浪する宮殿』所収）（共訳）　日本ヴァレリー研究会ブログ「Le vent se lève」（https://www.paul-valery-japon.com/blog）　二月

Le cycle sensorimoteur, l'implexe et la création poétique. William Marx et Mathilde Manara (eds.) *Valéry au Collège de France*. Éditions du Collège de France　二月

◉落語と学問する（共編）　水声社　三月

ジャック・ランシエール『文学の政治』　大橋洋一・三原芳秋編『文学理論の名著50』　平凡社　三月

森谷理紗

シベリア抑留下の日本人収容所で響いた音—民主講習会、ラジオ、手稿歌集の中の歌　戦争社会学研究会編『戦争社会学研究八巻〈聞こえくる戦争〉』　図書出版みぎわ　七月

矢木　毅

朝鮮後期の京軍と郷軍　東方学報　京都九九冊　十二月

安岡孝一

GPT系モデルの系列ラベリングによる品詞付与　東洋学へのコンピュータ利用　第三八回研究セミナー　七月二六日

◉Universal DependenciesとBERT/RoBERTa/DeBERTaモデルによる多言語情報処理（2024年9月版）　京都大学人文科学研究所・未踏科学研究ユニット・データサイエンスで切り拓く総合地域研究ユニット　九月二四日

GPT系言語モデルによる国語研長単位係り受け解析　人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2024」論文集　十二月七日

『日本書紀』におけるコードスイッチングについて　日本漢字学会第七回研究大会予稿集　十二月十四日

◉Universal DependenciesとBERT/RoBERTa/DeBERTa/GPTモデルによる多言語情報処理（2024年12月版）　京都大学人文科学研究所・未踏科学研究ユニット・データサイエンスで切り拓く総合地域研究ユニット　十二月三十日

青空文庫ModernBERTモデルによる国語研長単位係り受け解析　情報処理学会研究報告2025-CH-137（10）　二月八日

◉Universal DependenciesとBERT/RoBERTa/DeBERTa/GPTモデルによる多言語情報処理（2025年3月版）　京都大学人文科学研究所・未踏科学研究ユニット・データサイエンスで切り拓く総合地域研究ユニット　三月三十日

楊　維公

翻訳　道坂昭廣「南北朝末期的〝謝啓〟―詠物文的成立」　駢文研究　七巻一輯　四月

李　英美

国籍の喪失と「回復」―1970年代日本の国籍確認訴訟と補償問題　年報日本現代史　二九号　一二月

人権か、管理か―国連勧告に照らす入管行政と戦後日本　現代思想　二月号　一月

日本人の『自画像』を描く―戸籍・国籍・移動　世界　九月号　八月

李　媛

京都と私　人文　七一号　六月

TEIによる『篆隷万象名義』と原本『玉篇』の構造化記述における問題点　東洋学へのコンピュータ利用第三八回研究セミナー　七月二六日

日本古辞書の構造化記述について―『篆隷万象名義』を例にシンポジウム「字典・詞典の研究―回顧と展望―」　九月十九日

翻刻資料　关西大学藏・鲁迅《呐喊》与增田涛批注手记（1）《狂人日记》《孔乙己》《故乡》《鸭的喜剧》（共著）　東アジア文化交渉研究　一八号　三号

劉　冠　偉

漢字字形データベースGlyphWikiによって漢字構造情報を生成する試み　東洋学へのコンピュータ利用第38回研究セミナー　七月

Development and Application of hi-glyph: A Chinese Character Glyph Management System.（共著）
DH2024 Book of Abstracts　八月

Development of hi-text: an Attempt at Stable Encoded Character Shape and Unregistered Glyph Data Exchange in Transcribed Text Dataset.（共著）
Proceedings of JADH2024　九月

HDIC Viewerの再開発：日本古辞書ポータルサイトの構築に向けて　じんもんこん2024論文集　十一月

本草和名と古活字版和名類聚抄の全文テキストデータ（附：和名索引）（共著）
デジタル・ヒューマニティーズ　4（1）　二月

人文
第七二号
二〇二五年六月三十日
京都大学人文科学研究所発行
共同印刷工業
非売品